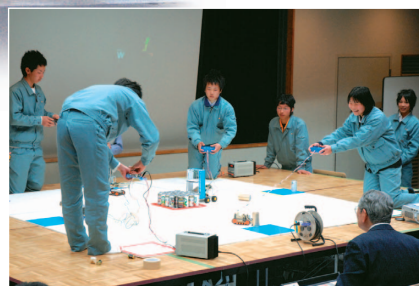
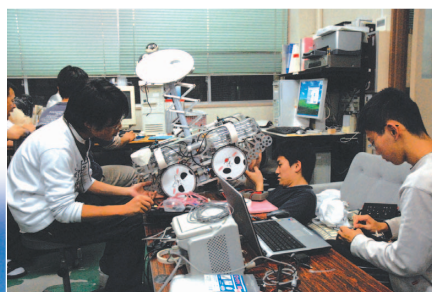


徳山高専だより

Tokuyama College of Technology

2006年度 No.60



徳山工業高等専門学校

目次

巻頭言	1
ホームページTop Newsで綴る徳山高専この1年!!	2
徳山高専のロボコン活動2006	
・ロボコン奮闘記2006	5
・ロボコン2006 IN 徳小	7
・ロボットコンテスト2006 in 徳山高専	8
全国高等専門学校プログラミングコンテスト	9
中国地区高等専門学校英語弁論大会	10
卓球部インターハイ出場	12
『ちらばる あつまる』-教職員交流レポート-	14
・長戸 喜隆「子午線のまちから～明石高専見聞録～」	15
・齊藤 一彦「『体育』を研究するとは・・・」	16
・西村 太志「1000kmはなれた雪国より」	17
・小田 和広「高専機構在外研究員として」	18
・橋本 堅一「2年間の人事交流を終えて」	19
・加田 謙一郎「私の愛した徳山高専」	20
・森 徹「交流人事での体験について」	21
・松野 成悟「eラーニング-教育改善と自分の見直し」	22
・野頭 克己「2年経ちました」	23
就職・進学状況	24
就職・進学試験体験記	29
卒業生だより	34
退職者あいさつ	37
新任者紹介	40
編集後記	

巻 頭 言

昨年は、本校において大変悲しい事件が起き、学生、保護者のみなさんはもちろん、地域の方々にもご心配をおかけすることになりました。学校も大きな衝撃を受けましたが、多くの方々のご支援と激励、そして、本誌に紹介いたしましたように、様々な分野での学生たちの活躍のおかげで、新しい年を、力強い想いで迎えることができました。

今年は、亥年。新しいスタートを切る準備をする年回りだということですが、教育改革が叫ばれる中で、本校としても、これまで積み重ねてきた実績の上に、さらなる改善の努力を積み上げていきたいと考えています。

まず、第一は、学生生活及び進路支援の充実です。ホームルームや課外活動の充実に加え、チューター制度の導入により、コミュニケーションの緊密化を図りたいと思います。また、学生相談室、進路支援室のこれまでの活動を基に、学生のみなさんがキャリアアップを図るために自主的に行う活動を、促進し、支援し、評価する仕組みを整備することにしています。校内の施設、設備についても、安全対策、教室の拡張、ネットワーク環境を中心に、計画的に整備する予定です。

二つめは、学習に関することですが、平成19年度から、夏休み前に、期末試験も含め、前期日程がすべて終了するようになります。また、高学年の1単位は、これまでの1.5倍の内容を含んだものになります。これは、座学の授業時間を整理し、演習や実験、ものづくり教育、インターンシップなど本校の特色ある科目を充実しようとするものです。そのねらいがしっかりと果たされるよう、カリキュラムや授業の改善、eラーニングを始めとする学習支援の充実を進めて参ります。

最後は、地域との連携の推進です。徳山高専サテライトの整備、拡充を進め、社会の中で学ぶ場を学生に提供するとともに、地域の活性化に一層の貢献ができたかと考えています。また、今年の11月には、「全国高等専門学校デザインコンペティション」が本校主催で開催されます。それと併せて、地域のみなさんも参加できる「周南デザインフェスタ」を開催します。本校学生の活躍はもちろんですが、小学生から大人まで、「ものづくり」に関心のある大勢のみなさんの参加を期待しています。

今年度、本校は大学をはじめとする高等教育機関が受けなければならない第三者機関による認証評価を受け、満足のいく評価を頂くことができました。また、本校の2つの取り組み（進路支援とサテライト）が、特色のある先進的な教育プログラムであると認定され、その推進のための特別な資金を得ることもできました。

そのような評価を背景に、今後とも、自信をもって教育研究活動を進めて参りたいと考えておりますので、ご指導、ご支援の程よろしく申し上げます。

校 長 天 野 徹

ホームページTop Newsで綴る 徳山高専この1年!!

先輩のキャリアに学べ

進路支援講演会「卒業生のキャリア体験談」

2006年1月21日



進路決定の時期を迎える4年生、専攻科1年生を対象に進路支援講演会が開催されました。各界で活躍中の卒業生を招き、高専卒業後の進路や現在の仕事など自分のキャリアを語っていただき進路選択の参考にしてもらおうと企画されました。6人の先輩の講演は最先端の仕事内容や勉強へのアドバイスに留まらず、転職や挫折など実体験に基づいた奥深い内容に後輩たちは聞き入っていました。

街の人たちにみてもらおう

夢広場で創造演習作品展示&人気投票!

2006年2月3日



土木建築工学科3年生が作った大きな模型8台が本校サテライト「高専夢広場」に運び込まれました。創造演習の授業で作成した徳山駅前広場再生計画を模型で表現し、街の人達に人気投票を行い、自分たちが考えた改善策について評価してもらいました。

春・旅立ち!

卒業式&修了式

2006年3月10日



第28回卒業式及び第10回専攻科修了式が行われました。本科卒業式ではインドネシアからの留学生を含む129名に卒業証書が、専攻科修了式では機械制御工学専攻6名、情報電子工学専攻3名、環境建設工学専攻10名の計19名に修了証書とJABEE「設計情報工学」プログラム修了証が授与されました。式場前面のスクリーンには、壇上で一人ずつ校長先生から証書を手渡された時ののはつらつとした表情が映し出されました。

Welcome to our Tokuyama College of Technology!

入学おめでとうございます

2006年4月4日



第33回入学式及び第12回専攻科入学式が行われました。式では機械電気工学科44名、情報電子工学科40名、土木建築工学科46名、マレーシア、スリランカ、モンゴルからの留学生3名、編入生3名、機械制御工学専攻3名、情報電子工学専攻4名、環境建設工学専攻11名の名前が読み上げられ、計154名の入学が許可されました。元気いっぱいの新入学生たちを迎えてキャンパスは賑やかになりました。

卓球男子ダブルス



インターハイ出場決定!

2006年5月6～7日

下関市体育館で行われた全国・中国高等学校卓球選手権大会山口県予選会にて、末弘真也君（土木建築工学科3年）と米元天馬君（機械電気工学科1年）が男子ダブルスで第2位となり、早々に全国大会（インターハイ）と中国大会への出場を決めました。8月に大阪市で行われる全国高等学校卓球選手権大会が楽しみです。

卓球男子3種目とも

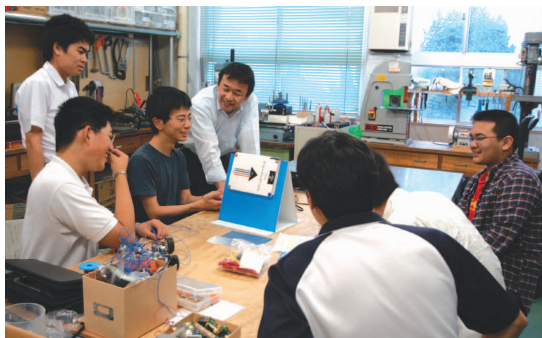


インターハイ出場!!

2006年6月3～5日

6月に開催された高校総体県予選シングルスでは、坪金靖君（機械電気工学科1年）が1位、米元天馬君（機械電気工学科1年）が2位となりました。更に、団体戦でも徳山高専が1位となり、先に出場を決めていた男子ダブルスに加え、男子シングルス、団体戦の3種目全てにおいてインターハイ出場の快挙となりました。

創造教育発



新たに2件が特許権認定!

2006年7月3日

機械電気工学科4年岩見昌範君は分厚い本でも本を傷めずにコピーができる「本に優しいコピー機」を考案し、昨年4月に出願、今年6月特許査定を得て特許権を取得しました。また、この春卒業した楠島悠介君も在学中に特許出願していた「声を失った人のための発声補助装置」のアイデアが7月特許査定となり、創造教育から誕生した特許権認定は3件になりました。

団体優勝5チーム、個人戦は15種目の優勝



中国地区高専体育大会

2006年7月7～9日

中国地区高専体育大会が、津山市、宇部市等で開催されました。団体競技では陸上、バレーボール、卓球、水泳、サッカーの5競技で優勝を果たしました。個人競技でも陸上7種目、卓球2種目、水泳4種目、テニス2種目で優勝しました。学生会体育局がつくった意気込み録など、今年の夏はスポーツが熱い盛り上がりを見せました。

熱く燃えた夏！

全国高専体育大会&西日本地区高専アーチェリー競技大会

2006年8月1～11日



全国高専体育大会では、卓球男子ダブルスで土木建築工学科3年末弘真也君、機械電気工学科1年米元天馬君が優勝、陸上男子1500Mでは情報電子工学科5年の山本康政君が優勝、団体競技ではバレーボールが3位と大健闘でした。西日本地区高専アーチェリー競技大会でも男子団体1位、女子団体2位の成果を収めました。

全国大会出場決定！

高専ロボコン2006

2006年10月15日



高専ロボコン2006中国大会が東広島運動公園体育館で開催されました。徳山高専A（ロボット名：パンダ倶楽部）チームは、縄跳びの独創的な発想や、ふるさと特産品の本物の「ふぐ」の皮を用いたユニークなオブジェが評価され、アイデア賞を受賞。東京・国技館で開催される全国大会へ出場することが決まりました。

ワンツーフイニッシュ！

英語スピーチコンテスト

2006年11月17～18日



第22回中国地区高専英語弁論大会が松江市で開催され、本校からも3人の学生が出場しました。大会当日は、3人とも練習の成果を十分に発揮し、最高のスピーチを披露。その結果、土木建築工学科3年の吉永晴香さんが暗唱の部で1位、機械電気工学科5年の濱尾啓大君が2位に、また土木建築工学科5年の富永大君がスピーチの部で4位に入賞するというすばらしい成果を上げることができました。

「技術賞」「特別賞」のW受賞！

高専ロボコン全国大会

2006年11月26日



国技館で行われた高専ロボコン2006全国大会において、本校のロボット「パンダ倶楽部」が技術賞と特別賞を受賞しました。今年はふるさと自慢の特産品を載せ、お堀越え、シーソー、スラローム、縄跳びを行いゴールするタイムを競いました。オブジェを水平に保つ機構やそれを落下させずに飛ぶジャンプ、高速のジグザグ走行を可能にした高い技術が評価されました。アイデアの実現に果敢に挑戦した成果はキラリと輝いています。

徳山高専のロボコン活動2006

ロボコン奮闘記2006

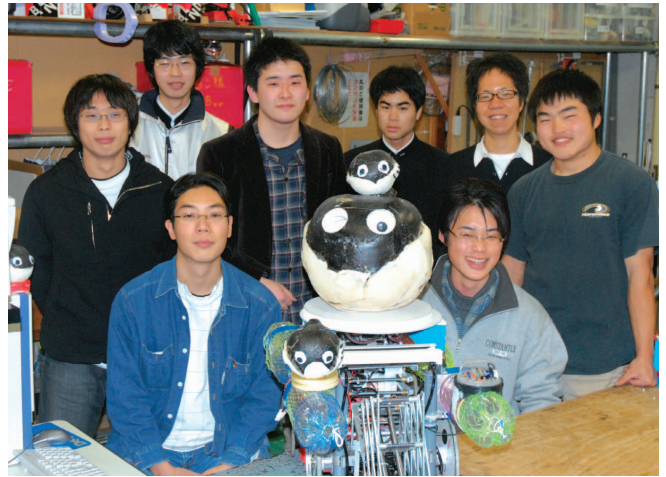
—メカトロボーイズの挑戦—

機械電気工学科4年 高瀬 善康
(親機設計・操縦担当)

見ている人に“おもしろい!”と思ってもらえること、これは私がいつも何かを考えたり製作したりするときに心掛けている目標です。ロボコン活動においても、見ている人の記憶に残るような、インパクトのあるものを作ることを目指して製作を行っています。今年の「ふるさと自慢特急便」は攻略しなければならない課題が多く、1つの障害に対して凝ったアイデアを採用しづらい競技でしたが、4年ぶりの全国の舞台でも十分に“魅せる”ロボットを披露できたことを嬉しく思います。

私にとって今回の製作の最大の課題は、変形・水平保持装置・四輪操舵・ジャンプなどのアイデアを、いかに小さなロボットへ統合させるかということでした。3次元CAD上で干渉チェックや変形のシミュレーションを行いながら寸法を詰めていったことが功を奏し、最終的にロボコン史上初を誇りたいほどに高密度に仕上げることができました。

しかし、その詰め込んだアイデア1つ1つを実現するために、多くのメンバーが自ら得意とする技術を持ち寄り、誇りを持って取り組んでくれた



ことを忘れるわけにはいきません。何を目指し、何を考えて製作と向き合っていたのか。それぞれ異なる役割を担った3人のメンバーに振り返ってもらいました。

情報電子工学科5年 神村 優介 (制御担当)

「ロボットは大きな展開やダイナミックな動きをします。しかし、観客を沸かせるそのようなアイデアも、ロボットが機械的な要素のみで構成されては実現は不可能です。外側からは見えないロボットの頭脳に、電子回路やプログラムという命を吹き込む。それがロボットの制御をするということであり、私たち制御班の仕事です。

私たちがいつも目標にしていることが2つあります。その1つは操縦者に負担のかからないロボット制御を行うことです。操作が簡単であれば、操縦者は本番でも安心して操縦ができ、より良い成績を残すことができます。2つめの目標は、見ている人に不自然さを与えないことです。見ている人にとって思うように動いてくれるロボットはすごく気持ちのよいものです。私たちの制御では“いかにもロボット”という不自然な動きではなく、“自分のペット”のような自然な動きにチャレンジし続けています。」

土木建築工学科5年 大田 篤 (オブジェ担当)

「ふるさとオブジェは、製作に協力して頂いた青

木商店さんからお借りした“ふくの土鈴”を基にデザインを行いました。お手製の熱線裁断機と目の細かい紙やすりを使って、材料となる巨大な発泡スチロールを滑らかなフグの形状に仕上げました。本物のフグの皮を貼り付けることで、指に突き刺さるほどの“フク”の魅力を再現しています。

これらの工程の中で特に大変だった作業は、発砲スチロールの加工と皮張りでした。発砲スチロールは熱線でスルッと切れ、元に戻すことができないので、しっかりとイメージを固めてから慎重に形作っていきました。また、皮張り作業は“フク(皮)”が放つ、何とも表現のできない異臭に耐えながらの苦行となりました。素手で作業するので、その臭いが手につき、簡単には取れませんでした。これも忘れられない思い出です。」

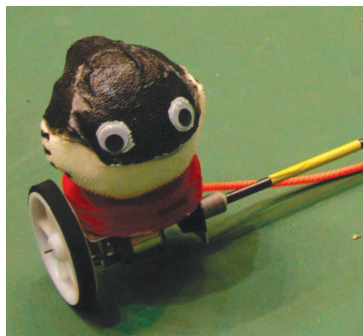


ふるさとオブジェ

機械電気工学科2年 廣瀬 大(制御・子機担当)

「1、2年生で親機が縄跳びをするための縄を回す子機を担当しました。ただ縄を回すという地味な役目でありながら、試行錯誤した期間は長いものでした。初期の子機は、縄と平行に張ったワイヤーで衝突を感知することで回転を始め、一定の速度で回転する簡単な動作をするものでした。しかし、一定の速度では飛びにくいという意見から回転中に定位置で反応するリードスイッチを付け、そのスイッチが入ると加速するようにしました。

中国大会が終わっても、全国大会に向け子機の進化は止まりませんでした。縄を結んでいる棒の高さとデザイン面を改良するためゼロから作り直すことになりました。リードスイッチの増設により衝突時の反応時間の短縮を図り、さらに起動スイッチにも工夫を凝らしました。縄跳びゾ



縄跳び用子機

ーンへの親機の侵入と同時に回転を始めるように中心についていたスイッチを腕先へと付け変え、さらに左右2つに増やすことによって赤青各コートに合わせた回転方向の切り替えを可能にしました。縄跳びが失敗した場合も考慮し3回転するとおおよそ元の位置に戻るようにもしました。

全国大会では直前まで改良を重ねた甲斐があって順調に動作していましたが、最後の試合ではよく分からない動作をしてしまいました。私は今回、ロボコンでロボットを作る難しさと面白さと辛さを知りました。次回もがんばって行けたらと思います。」

このように今年のロボコンでは、例年以上にそれぞれのメンバーの得意とする部分を注ぎ込んで製作が行われました。他の人のもつ知識や技術に触れながら活動を行うことは、自身の知識や技術の幅を広げることができ、同時に多分野の考えを導入することや共同開発を行うことの重要性を知ることになります。私にとっては、これが本当に貴重な活動であり、ロボコンに参加する価値を生み出すのだと思っています。

これからの課題としては、毎年の全国大会出場に向けて、ロボコン制作メンバー間での技術の共有を行うことが重要になってきます。ものを“創れる人”を育てるためのロボコン活動を意識して、来年も頑張ろうと思います。

最後になりましたが、過密スケジュールに耐えて頑張ってくれた制作メンバー、様々な方面で協力して頂いた先生方には本当に感謝しています。ありがとうございました。



華麗なジャンプ

ロボコン IN 徳小

小学生の柔軟さに 高専生が驚いた!!

機械電気工学科 助教授 兼重 明宏
 情報電子工学科 助教授 義永 常宏
 情報電子工学科 助教授 奥本 幸
 庶務課 地域連携推進係

徳山高専と周南市立徳山小学校は、独立行政法人科学技術振興機構ロボット・実験学習メニュー開発支援事業の支援を受け、新たな学習プログラムを開発しました。6年生の総合学習において、「ロボコンにチャレンジしよう」をテーマに、第1次：ロボットのプロに学ぶ、第2次：ロボットを動かそう、第3次・第4次：「ロボコン2006 IN 徳小」を開催するというものです。

第1次 平成18年7月13日 (木)

機械電気工学科の兼重明宏教員が「ロボットのいろいろロボットの歴史と役割、未来のロボットー」と題して、6年生102名の児童を対象に講義を行いました。



第2次 平成18年9月27日 (水)

情報電子工学科5年の8名の学生が、光センサーを使用したラインレースロボットの製作をサポートしました。

小学生の柔軟な発想に何度も驚かされました。私には思いもつかないことを、「やってみよう!」と挑戦していく姿勢は、ぜひ見習いたいです。とてもよい経験になりました。

(竹上小百合)



センサやタイヤ等を制御するプログラムにもみんな果敢に挑戦している姿がすばらしいと思いました。そしてまた、多くの子が高専に興味を持ってくれてうれしかったです。

(木村優之)

小学生が考えたオリジナルコースは難しく、班のみんなと相談しながら楽しく作業できたのはいい思い出です。給食の時間には質問の嵐でしたが、楽しくて、帰るのが名残り惜しかったです。

(山中敬子)

課題が意外と難しく、プログラム以外にも色々な工夫が必要で、授業時間中は面白さ半分、焦りが半分でした。進学先の大学で、機会があれば教育実習に行ってもいいかな、と思えた良き体験でした。

(米元大我)

うまくできた班、なかなかできなかった班とさまざまでしたが、みんなで楽しく協力してやっていたところに感心しました。これからもそのようなところを大切にしてほしいと思いました。

(蔦川和宏)

小学生らしい柔軟な発想と、それを実現しようとする一生懸命な姿に感心しました。難しい課題にも、果敢に挑むチャレンジ精神を教わりました。楽しそうに作業をする姿は羨ましく思いました。

(杉山淳一)



小学生の頭の柔らかさに驚かされました。想像力豊かな様々な答えを導き出してくる彼らは、いろいろな面からの視点を持っているのだと感心しました。

(賀田敬子)

僕が小学生のころは、パソコンを使った授業はおろかパソコンすらなくて、今回のLEGOロボット作成の授業を見ていてジェネレーションギャップを感じました。小学生の発想の広さには驚きました。

(山地雄士)



第3・4次 平成18年11月7日 (火)

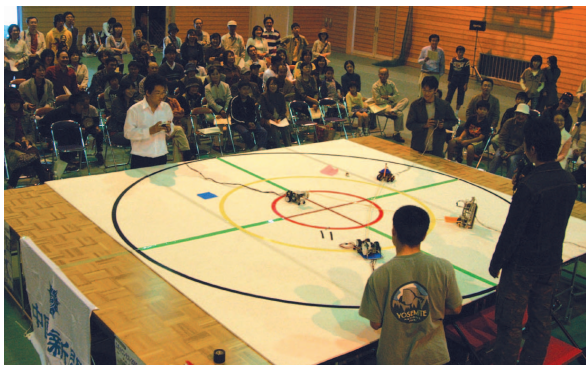
「ロボコン2006IN徳小」では、企画、立案、運営をすべて児童が行い、LEGOブロックを活用したコンテストが開催されました。

ロボットコンテスト 2006 in 徳山高専

『大成功！ Pull DASH! 2006』

機械電気工学科3年 日野 尚武

市民ロボコンとして今年で3回目を迎え、市民にも定着しつつある高専祭ロボットコンテスト。中国新聞防長本社さんにも多大な協力をして頂き、



広告掲載やポスター作成などの宣伝も十分に行えたと思います。大会に先駆けて、夏休み中に2回ほどロボコン説明会兼製作アドバイス会を開催し、多くの小学生にPRできたこともよかったです。その結果、昨年を大きく上回る37名の参加者を得ることができました。小学2年生から60代の方まで、幅広い年齢層の方々に参加して頂き、当日はとても盛り上がりました。

今年のテーマは、「Pull DASH!2006」ということで、4台のロボット同士が綱引きをするというシンプルなテーマながらも壮絶な戦いとなり



ました。3分間の制限時間ギリギリまで熱い戦いをしたり、スタートと同時に勝負をつけ、会場を騒然とさせた戦いがあったりと、どの試合も目を離すことのできない試合となりました。学内の参加者は、高専生の意地を見せようとオリジナリティ溢れるロボットで参加しましたが、多少のハン

ディがあったせいか、小学生に負けてしまう場面もありました。また、この大会ではロボコン大賞をはじめ、技術賞やアイデア賞、デザイン賞などが用意されるということもあり、ニワトリロボット、カービーロボット、お茶犬ロボット、戦闘ロボットと37人37色のロボットが勢ぞろいしました。審査員の方も、どのロボットを選ぶかに悩まれていました。そして、試合中に一番驚いたことは試合を見に来られた観客の多さです。当初、体育館には100脚の椅子を用意した時には「こん



なに準備してどうするんだろう・・・。逆にガラっとした体育館になるんじゃないか。」と正直思っていました。しかし、驚くことに、試合が始まると続々人が集まり、あっという間に100脚の椅子では足りなくなってしまい、追加で椅子を出さなければならない状況になりました。ここまで観客が集まるとは思ってもいなかったの、本当に企画した自分にとっても嬉しかったです。来年はさらに多くの参加者で壮大なゲームを繰り広げることができたらいいなと思っています。協力してくださった方々、本当にありがとうございました！！



全国高等専門学校プログラミングコンテスト

「プロコンに出場して」



情報電子工学科3年
作本 みなみ

映画化もされた「ロボコン」に比べて、あまりメジャーでない「プロコン」というものを知ったのは、去年の冬頃でした。「何か、授業だけでは学べないことをしてみたい。」そう思っていた私は、今年初めて、課題部門の一員として参加しました。

今年の課題は「子供心とコンピュータ」。私達は、子供にも大人にも楽しんで貰えるものを作りたい、と「とってもだいすききりえもん」という切り絵制作支援ソフトを作ることに決めました。

初めてのプロコン。夏休みからの3ヶ月は大変でした。学校に通っては、一日中パソコンに向かう毎日。小さなバグをひとつ取るのに何日もかかったりして、投げ出したくなることも何度もありました。それでも頑張れたのは、一緒に作っている仲間がいたからだと思います。最初はバラバラだったメンバーが、製作が進むうちに、同じ目標に向かって団結していく。

学んだことは沢山ありましたが、一番大きな経験となったのは、意外にもプログラムに関してではなく、皆でひとつのものを創り上げていくということです。ひとりで作ることに、みんなで作ることに。これらは似ているようで、全く違う難しさと面白さがありました。

会場では、他の高専のレベルの高さや発想の豊かさなどに、驚かされるばかりでした。

結果は敢闘賞。最優秀賞などは取ることが出来ませんでした。子供から大人まで、国籍を超え、幅広い人々が切り絵をしている時の楽しそうな顔を見て、このソフトを作ったと心から思いました。

また、いろんな作品を見て、全く違う発想を持つ他高専の人に話を聞き、それらに実際に触れて

みるという、普段では出来ない貴重な経験をすることが出来ました。

「こんなものがあつたらいいなあ。」

それがひとつのシステムであつたり、ソフトウェアであつたり、形はさまざまですが、そんな「夢」を実現する。それがエンジニアという仕事であり、何かを創るということの原点であるということ。何より大切なことに気付くことが出来ました。



情報電子工学科3年
河内山 和也

今回は2度目の課題部門参加だった。一年の時から、会場へ行っているのだから、どういうものかは知っていたが、それでも反省すべき点がたくさんあった。

まず、計画的に出来なかったこと。夏休み後半、あまり作業が進行せず、最後の方であせっていたので、プレゼンの練習がろくに出来なかった。

また、アイデアはよかったのだが、提供する機能や売りが不十分だったということ。

必要なのは技術だけでなく、利用者が何を要望するだろうか、ということを入念に入れなければいけないと思った。

来年はもっと技術力を磨き、頭を柔軟にし、アイデアを熟成させて臨みたい。



中国地区高等専門学校英語弁論大会

「英語のスピーチコンテストですばらしい成果!!」



一般科目（英語） 教授
国重 徹

平成18年11月17日・18日に松江高専で第22回中国地区高等専門学校英語弁論大会が開催され、本校からは3人の学生が出場しました。3人とも最高のスピーチを披露し、CA3年の吉永晴香さんが暗唱の部で1位、ME5年の濱尾啓大君が2位に、またCA5年の富永大君がスピーチの部で4位に入賞するというすばらしい結果が出せました。厳しい練習を経て、大きな成果を得ることができた彼らの思いを以下に紹介します。



左より富永君（CA5年）、吉永さん（CA3年）、濱尾君（ME5年）



土木建築工学科3年
吉永 晴香

昨年度参加できなかったのが2年分の思いをぶつけたスピーチでした。制限時間に縛られたスピーチ

でしたが、3役をこなせ、頭の中の映像と内容をリンクできたものだったので、納得いくものになったと思います。ですが、今回はいつも以上に練習が厳しかったです。まず、前回参加できなかったのが発音記号は全てうろ覚え。そして、今回の原稿は普通に読めば、6分強はかかってしまうもので5分以内に収めるのも苦労でしたが覚えるのも大変でした。私の覚えるスピードを急かすように一緒に出場する先輩達は早く覚えて、何

をしていても焦りました。そんな状態から、今回の結果まで導いてくださった先生方、スパルタ練習してくれた友達、応援してくださった方々、そして共に練習してきた先輩方に大きな感謝の気持ちを送りたいと思います。ありがとうございました。



機械電気工学科5年
濱尾 啓大

3年越しの願いがようやく叶いました。後輩に優勝を譲ってしまったのは今でも悔しく思いますが、それが現実と思って受け止めるほかありません。一昨年に某先生が弁論大会に出場してみないかと誘ってくれたのをきっかけに私の英語に懸ける思いは一変しました。

大会初出場の一昨年はまだまだ未熟でした。自分自身完璧と思って臨んだ大会も他の参加者の発表に感動するばかりで、残念な結果に終わってしまいました。

そして去年は一昨年の悔しさをバネに臨んだものの、4位とあと一步のところまで3位以内入賞を逃しました。今度こそという思いと最上級生としてのプライドを懸けて臨んだのが今年でした。3位以内入賞に一步でも近づくためには、順番を決めるくじも私にとって大変重要でした。発表者の中で最後に引いたくじは、見事に暗唱部門のトリを任される番号が書かれていて、自分でも驚きでした。最上級生として最後の大会、そしてトリを任せられ、あとは自分の持つ実力を発揮できるかどうかだけで、3位以内入賞に向かって視界は良好でした。

今、振り返ってみると発表はあっという間でネイティブの方が私のスピーチに笑い、私もそれに

つられ顔はほころび、何か一人漫才でもやっているような感覚に陥っていました。

結果は3年間の中で最も良く、納得のいく準優勝をとることができ、指導してくださった国重先生をはじめ、練習に付き合ってくださいました先生方、学生の皆さんにまずありがとう、そして頑張った自分におめでとうと言いたいです。

『継続は力なり』という言葉通り、特に英語に関しては耳で聞き、口に出して喋るという絶え間ない継続と努力が確実に身になることをこの3年間を通じて実感させられました。

国際社会に生きていく高専生にとっても英語を道具ではなく、武器にできるよう今後努力して欲しいです。



土木建築工学科5年
富永 大

今回のスピコンは、僕にとって『高専生活の集大成』でした。なぜかという、大きく2つ理由があります。1つ目は高専に入ってから英語が好きになり、常に英語に対して挑戦し続けてきたからです。2つ目は、スピーチの内容が部活についてだからです。僕は、女子バスケ部のマネージャーとして5年間選手を支えてきました。また、徳山高専で唯一の男子マネージャーなので、多くの人に僕の女子バスケ部への思いを聞いてもらいたかったからです。

初めての参加にもかかわらず4位と大変嬉しい結果も残せました。また、審査員の方からも、君の内容が1番良かったと言われ、男子マネージャーとして誇りに思えました。まさに、『高専生活の集大成』になりました。

卓球部インターハイ出場

「インターハイに出場して」

一般科目 教授 原田 幸雄



高校生の夢の舞台、インターハイ（第75回全国高等学校選手権大会）は、平成18年8月6日～11日の日程で大阪市中央体育館にて開催されました。全国の高校の運動部で熱心に練習している生徒、そして指導しておられる先生にとってこのインターハイは、1つの頂点です。団体戦は、一県一校の枠ですから、まさか我が徳山高専が出場することになるうとは・・・いや、しかし、いつかはインターハイに行こうと夢は持ち続けていました。

そしてその夢が平成18年の夏、ついに実現したのです。文字通り‘DREAM COME TRUE’の心境です。

全国高等学校体育連盟（高体連）の大会に高等専門学校（高専）が出場できるようになったのは、平成7年度からです。開校以来33年間、卓球部を指導している私の一番の苦勞は、「5年間続けてもらえるだろうか」ということでした。それまでは、高体連の大会に出場できなかったため、試合といえば高専大会だけでしたから7月の地区予選、8月の全国大会の後は半年以上大会がないので、モチベーションを持続させるのはとても難しい事だったからです。そこにこの高体連への参加が認められたことで、試合の機会が増え、次の試合に向けて、またその次の試合に向けてということで、小さな目標から大きな目標まで設定することがで

きるのです、学生の方も意欲的に練習に取り組むことができるようになりました。また、高専の1年生から3年生までは、高等学校の1年生から3年生までと同じ年齢ですから、かつての仲間と再び試合をすることができるということは、高専の学生にとってうれしいことでした。高体連の試合は、地区大会、県大会、中国大会、全国大会と数多くあり、これらをこなしながら、高専大会という目標に向かって年間の指導計画を立てています。1年生から3年生までは、高体連と高専大会の両方の試合に出場できますが、4・5年生になれば高専大会の試合だけになりますので、社会人（一般）の出場する試合に参加させて実力を付けるようにしています。1年生から3年生までの学生にとって、この4・5年生と毎日練習ができるということは、普通の高等学校と違って恵まれた環境にあるといえるでしょう。卓球の技術を身につけるだけではなく、勉強と部活との両立、将来の就職・進学のことなども含めて先輩から学ぶことは、非常に多いからです。こうして、練習したことの積み重ねと入学以前から実力のあった1年の入部とが重なり、県大会で団体優勝をして、インターハイ出場となったわけです。これまでも個人戦では、インターハイに出場したことがありますが、団体戦での出場は‘夢’に近い状態でしたから、学生にとっても私にとっても非常に喜びでした。

全国の高専においても個人戦での出場はありますが、団体戦での出場は初めてのことで「快拳」といってもよいかもしれません。山口県には私立の強豪校が少ないため、現在は公立高校中心の混戦状態です。徳山高専のこれまでの最高成績は県大会2位で、あと一步でしたが、この2位と1位との間には大きな隔たりを感じていました。思えば、着任早々の5年間は、学生時代に自らが経験した部活動であるとはいえ、指導した経験はなく、手探り状態で、如何にすれば「1勝」を手にすることができるのか、学生と共に悩みつつ、ただひたすら練習に励むだけでした。こうして高専の中国大会で1勝すらできないチームが、初めてこの中国大会で2位になったのは、チームの基礎づくりを共にしてきた第1期生を送り出した翌年の6年目でした。それからさらに10年後にこの大会でやっと1位になりました。この2位から1位までの道のりの長さを思うとき、団体戦で1勝することの難しさを痛感してきましたから、高体連の試合では、1位には手が届かないだろうなというのが実感であったわけです。

さて、初めてのインターハイ出場では、1回戦を勝ち抜けばあの史上最強軍団「青森山田高校」

と対戦できるという楽しい組み合わせでした。しかしながら、この1勝はありませんでした。相手の今治南高校の方が優っていました。勝負には惜敗はない、負けは負けというのが私の信念です。一生懸命戦った学生には、拍手を送りたい気持ちです。そして、また、次の試合に向けて一步を踏み出してほしいと思っています。次の大会での勝利という同じ目標に向かって学生同士が切磋琢磨し、自らの心と体を鍛えていく姿を放課後の練習時間で間近に見るとき、学習指導中とは異なる「教育指導」の大きさ、大切さを感じることがあります。

確かに勝利することは目標であるのですが、それは、一人の力ではできないということを学生自信が知り、自分自身の技術を身につけるだけではなく、多くの人に支えられていることへの感謝の気持ちがわかるわけで、そのことも勝利することとは別の大きな目標だと思っています。

これからも徳山高専の一教員として、また卓球部の顧問として学生と共に学び、歩んでいきたいと思っています。



—特集—

ちらばる あつまる

—教職員交流レポート—

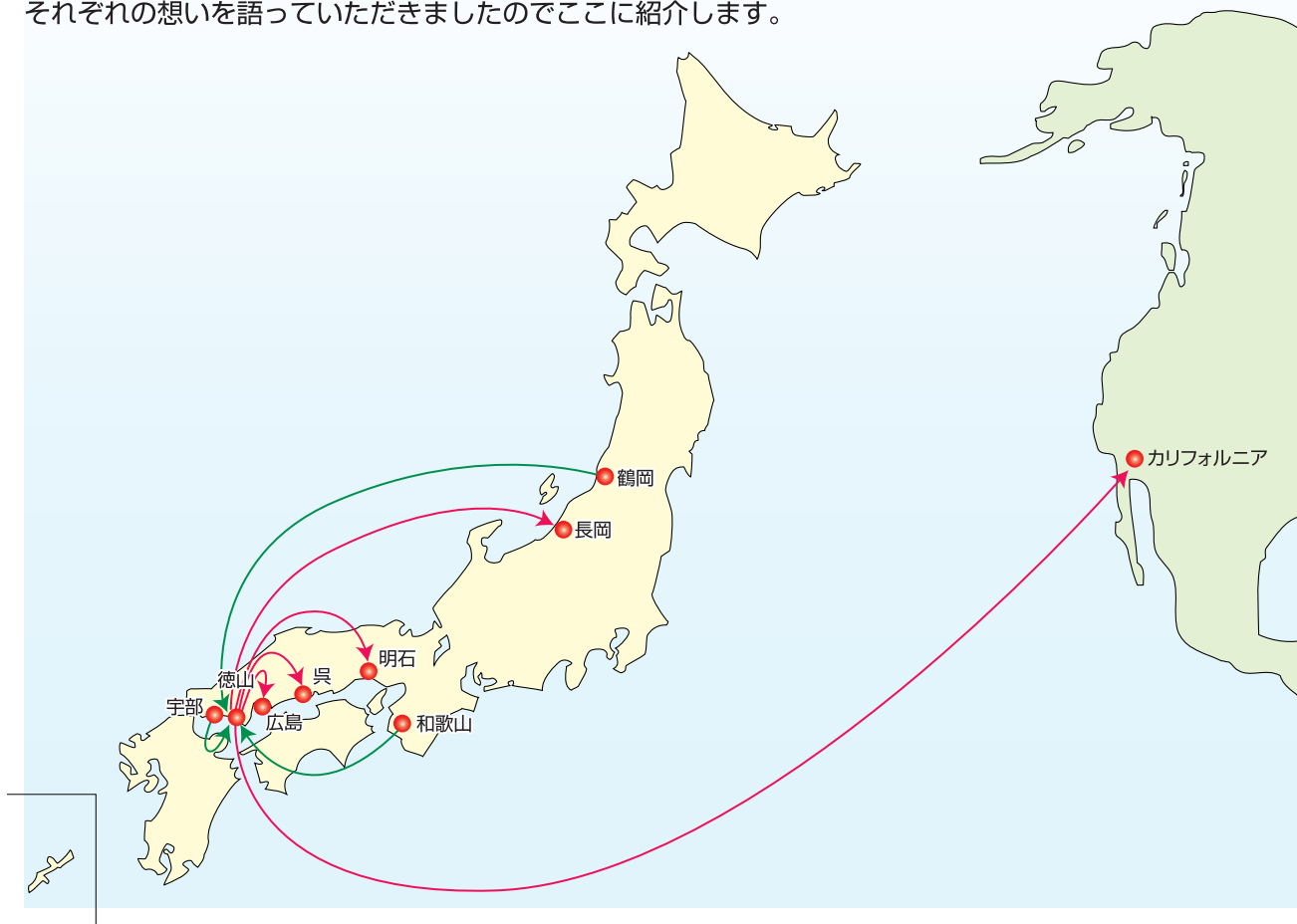
高専間教員交流制度とは…

全国55の国立高専の交流を目指し、教員を他高専に派遣する「高専間教員交流制度」が、平成18年4月から導入されました。

この制度は、人事交流を通して教員の力量を高め、教育や研究の向上を図ることを目的としています。

初年度である今年は、本校へ3名の教員が、また本校からは1名の教員が派遣され、それぞれ活躍されています。

本校では、この制度による人事交流の他、様々な教職員の交流を展開しています。“交流”をテーマに、それぞれの想いを語っていただきましたのでここに紹介します。



「子午線のまちから～明石高専見聞録～」



一般科目 助教授 長戸 喜隆
(交流先:明石工業高等専門学校)

徳山高専の皆さん、ご無沙汰しています。私は平成18年度から始まった国立高専の教員人事交流制度の1期生として、16年間慣れ親しんだ徳山高専を離れ、2年間の予定で兵庫県の明石高専に来ています。

明石高専は日本で最初の国立高専12校のひとつとして昭和37年に設置されました。現在、機械工学科、電気工学科、都市システム工学科、建築学科の4学科を擁しています。日本で2番目に新しい徳山高専とは好対照ですし、徳山高専のような複合学科でもありません。

私が交流先として明石高専を希望した理由は、英語科スタッフの充実ぶりにあります。常勤教員が5人、そのうち1人がネイティブ・スピーカーという恵まれた状況に着目しました。ネイティブ・スピーカーを正規のスタッフに擁しているところは珍しいからです。5人のスタッフの役割分担と授業レベル・授業内容・授業方法などを参考にさせてもらって徳山高専の英語教育に生かそうと思っています。

4月3日、辞令交付。私は機械工学科1年の担任となりました。その翌日が入学式でした。式は厳粛で晴れやかなものでした。教職員は例外なく全員礼服、新生は制服が廃止されている関係で全員スーツ姿でした。会場は、体育館でなく近くの立派な公共施設でしたが、会場は満席でした。教室に入って初めてのHRをするとき、平日にもかかわらず両親で出席されている家庭が大半なのに気づき、改めて親の期待の大きさを実感しました。新生に聞いてみても、施設の充実ぶり、卒業後の進路で明石高専を選んだ学生は多いようです。あとで知ったのですが、入学試験の平均点は毎年、全国トップレベルで、進学者の殆どは国公立大学に編入学するそうです。平成17年度は合格のべ人数が100名を超え、実進学者数は70名だったようです。

新生の担任として最も印象に残っているのは、淡路合宿です。到着と同時にクラスを半分に分け、正担任と副担任が一人ずつ分乗して、ぶつつけ本番でカッター訓練に挑みました。20名の息が合うと、他艇と競い合いが出来るようになりました。

内湾の穏やかな海とさわやかな風と日差し、淡

路島の姿と各学科が趣向を凝らす楽しい出し物(スタンツ)、それらがよい思い出になりました。この他、2年生はクラス毎にUSJ訪問、梨狩り、有馬温泉探訪、グライダー滑空などを思い思いに楽しみ、3年、5年の見学旅行はほぼ徳山高専の3年、4年の見学旅行のような感じで行われています。



明石高専では入学者の確保のため毎年夏休み期間中、校長以下全教員が手分けしてほぼ全県的に中学訪問を行い、新生の確保に努めています。一般教員が3～4校、各学科2名の教務委員が10校程度を回っているようです。15歳人口の多い人口密集地域にありますが、それだけに普通科高校のライバルも多いので、毎年欠かせない業務とか。私も太子町やたつの市の3校と神戸市の1校を訪問しました。もうひとつ教務関係で記しておきたいのは、入念な学生指導です。定期試験毎に成績連絡会議を行い、各教員に情報提供して、普段からの補充指導などを促しています。

学生主事・副主事の先生方の支えもあって学生会活動も盛んです。4月の対面式、5月のクラスマッチ、9月の体育祭、11月の高専祭、12月のクラス対抗サッカー大会など忙しそうに学生会の役員諸君が精力的に運営しています。休日の体育館のクラブ割り振りも学生会の重要な仕事です。

私は後期から寮務委員も兼務することになり、寮の連絡会議や行事にも参加しています。寮は整然とし、徳山高専の寮のイメージに近いです。

最後に徳山高専の外に出て気がついたことを一言。恐らくこれは、代々の卒業生の皆さんや元職員の皆さんも同じ気持ちだと思います。遠く離れた私たちは、徳山高専が元気に頑張っているのを見聞きすることで、勇気づけられます。また、徳山高専の取り組みは他に誇れるものだということも知りました。実に多くの先生方にお褒めいただいています。皆さん、熱き思いと声援を徳山高専に寄せている人達が沢山いることをお忘れなく。

「『体育』を研究するとは・・・」



一般科目 助教授 齊藤 一彦
(交流先：広島大学大学院)

平成18年8月から、文部科学省内地研究員として、広島大学大学院教育学研究科に赴任しております。今回、人事交流体験記を書くよう依頼を受けましたが、内地研究員というのは、通常の人事交流とは異なります。ひたすら研究室に籠って研究に専念する毎日です。従って「人との交流」というのは、指導教授から指導を受ける時以外にはほとんどない毎日です。こういった状況ですので、今回は、私の研究のことを書かせて頂くほかなく、お付き合い頂ければと思います。

現在、広島大学の中の「体育科教育学」研究室に所属しています。「体育科教育学」とはどのような学問かご存知でしょうか。徳山高専に赴任して、よく「何の競技を専門に研究していたのですか？」という質問を受けます。確かに、一般的な感覚では体育教員というのは、何かの競技のことやトレーニング方法、もしくは体に関することなどを専門的に研究しているというイメージがあるのかもしれませんが、しかし、私の所属している「体育科教育学」研究室では、まず「体育」とは何なのか、そして何を目的に、どのように行うべきなのかという根本的な理論を考えていくといった学問に取り組んでいます。特に私の場合は、わが国だけではなく、開発途上国などで体育は一体どのように考えられているのか、そしてどのように実施されているのか、またどのような課題があるのか…といったことをテーマに研究をしております。

「開発途上国で体育？スポーツ？」ピンと来ない人もおられると思います。しかし、多くの開発途上国において、わが国と同様に、運動不足やストレスが社会問題化しつつあります。また子供たちの健全な心身の発達のために、体育、スポーツは注目されつつあります。ただ、予算不足、体育施設不足、体育教員不足などで、うまく機能して

いない場合が多いのです。こうした中で、体育・スポーツ先進国としてわが国が協力できることはないだろうかというようなことを、考察しているところです。

他国の体育事情を調べることは、わが国の体育事情を客観的にみることに繋がります。改めてわが国の体育制度の特徴や問題点などが浮き彫りになってきます。このような中で、これからのわが国の「体育」はどのようにあるべきなのか、また、高専での「体育」はどうあるべきなのだろうか、という大きな問いかけを常に念頭に置きつつ、研究を進めております。研究成果が机上の空論とならないよう、常に教育現場と関連付け、今後の教育活動に活かせるような研究成果を残したいと思っております。

ところで、8月以降、教育現場から遠ざかっていますが、最近、高専の学生さんの顔がよく頭に浮かびます。みんな、元気になっているかな、あいつはきちんとやってるだろうか…など、広島にいながらも、学生のみなさんのことがいつも気になります。来年度4月以降、皆さんとお会いできることを心より楽しみにしているところです。

今回の内地研究員派遣は、本校の皆様の多大なご理解、ご協力があった実現できたことです。このような機会を与えて頂いたことを、心から深く感謝したいと思います。

「1000kmはなれた雪国より」



機械電気工学科 助教授 西村 太志
(交流先：長岡技術科学大学)

こんにちは。長岡技術科学大学の西村です。昨年4月から2年間の任期中長岡技術科学大学に赴任しています。私は高専機構と長岡技術科学大学の人事交流で長岡技術科学大学技術開発センタープロジェクトに参加しています。お世話になっている研究室は工学部機械系（機械創造工学課程および同専攻）の超音波・非破壊研究室で、構成メンバーは助教授、外国人研究者1名、ポスドク1名、博士後期課程学生1名、修士課程学生5名、学部学生5名です。主な研究分野は機械工学、計測工学、材料工学をベースとした非破壊材料評価で、超音波計測とナノインデンテーションの応用研究を中心に行っています。私は修士課程学生2名、学部学生1名と一緒にナノインデンテーションに関する研究を行っています。

ナノインデンテーションとは材料の表面をナノメートルオーダーで押し込み、硬さや弾性定数などを求める技術です。本研究室はナノインデンテーション技術に関しては日本においてパイオニア的存在で、企業と共同して試験機や試験方法を開発してきた研究室です。そのため、早い時期からナノインデンテーションに関する研究を行っており、比較的膜厚の大きい硬質材料に関してはすでに試験法を確立しています。そこで私は、これまで強度評価が困難であった軟質材料の薄膜に対するナノインデンテーションの新たな応用・展開を模索しているところです。この分野の需要は多く、現在も数社の企業から研究の依頼を受けており、学生とわいわい言いながら毎日実験しています。徳山高専では金属材料の疲労強度を解明するため、光学顕微鏡や電子顕微鏡を使用してマイクロメートルオーダーのき裂の連続観察を行ってきましたが、こちらでは扱うスケールがナノメートルオーダーなので、これまでの常識が通用しないことも多々あります。そのため、毎日が勉強の日々です。2年間の間にナノインデンテーション試験の新た

な展開を創生することを目的に頑張っています。

話は変わりますが、長岡は昨年まで2年連続大雪でした。私が赴任してきた4月1日にもまだ雪が残っており、5月になっても霰（あられ）が降る日がありました。2年間の人事交流なので、冬の雪も楽しもうと考えていたのですが、今年の冬は期待はずれで、1月に入っても雪が少しちらつく程度で、ほとんど積もりません。と、この原稿を書いていたら雪が降り始め、現在は15センチメートルくらい積もっています。長靴を履いて大学に通っています。

日々の生活においても驚くことが多く、長岡にきて最初に驚いたのは「信号機」です。雪が積もりにくいように縦に三つ並んでいるんですよ、見たことありますか？ また、山口では冬になると乾燥するので、家では「加湿器」を使っていたのですが、長岡では冬でも湿度が高く、「除湿器」が必要です。それと、長岡では冬になるとほとんど太陽が現れません。週間天気予報を見ても毎日雪マークか雨マーク、結構、お日様が恋しくなっています。気候が変わるとこんなにも生活環境が違うものなのかとビックリです。

大学でも、日々の生活においても新鮮なことが多く、あつという間の9ヶ月でした。残りの1年3ヶ月が充実して過ごせるよう頑張り、来年の4月にはパワーアップして徳山高専に戻りたいと考えています。



高専機構在外研究員として



機械電気工学科 助教授 小田 和広

(派遣先：カリフォルニア大学アーバイン校、派遣期間：平成18年3月～10月)

平成18年3月より10月までの約7ヶ月間、高専機構在外研究員として、カリフォルニア大学アーバイン校（UCI）のAtluri教授の下で、研究する機会をいただきました。

「汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る」（良い環境と友人の中で交流すれば真直ぐに成長することができる、という意味です）との箴言がありますが、本校とは、規模も文化も異なるアメリカの大学での経験は、大変な刺激となりました。

UCIはカリフォルニア州ロサンゼルスから南に車で45分程の場所にあり、本校と協定を結んでいるUCSD（サンディエゴ校）へも1時間程の位置です。温暖で、夏は摂氏40度を超えることもあります。湿度が低いので日陰や朝夕は大変涼しく、日本の夏よりも遥かに過ごしやすいところです。アーバイン市は全米一治安がよく、教育に関心の高い街として、子供の教育のために、わざわざこの街に移ってくる人も多いそうです。実際、街はすごく整備されていて、危険そうな路地や地域もなく、近くには日系、アジア系、中近東系のマーケットもあり、物価が高いことを除けば、私のような海外ビギナーには、非常によい街でした。

さて、UCIのキャンパスですが、これは大変広大であり、その中心部は非常に大きな公園のようになっています。公園から同心円状に、専門分野がそれぞれまとまって建物を並べています。アーバイン校の校舎は、映画「オーシャンズ11」等の撮影に起用されたこともあるそうです。UCIの学生の6割はアジアからの留学生で、私の研究室も研究者2名と博士・修士課程の学生は全て中国からでした。学生は、大きなテキストを常に抱えており、ベンチや食堂ではテキストやパソコンを開いて勉強している姿が見られます。日本の学生と比較し、やはりよく勉強するなーという印象です。

Atluri教授は、計算力学の分野で高名な研究

で、私も初めてお会いしましたが、親切に世話をしてくれました。普段は温厚なのですが、研究の打合せの時は眼光がするどくなり、一流の研究者の厳しさを感じました。この研究室では、最新の解析手法を研究しており、有限要素分割の不要なメッシュレス解法などが開発されています。私は有限要素法による界面破壊の研究を行い、私が提案する手法とAtluri教授らの手法の効率性について比較しました。時間的に厳しかったのですが、ちょうど7月にロサンゼルスで開催された計算力学分野で最大の国際会議（WCCM2006）で発表することができました。他にも、英会話や材料力学のコースを受講し、アメリカの大学生の勉強態度や授業評価の方法など大変参考になりました。

Atluri教授の下には来客も多く、その中の一人であるMa博士（イギリス・シティ大学）と懇談をする機会がありました。イギリスでの教育・研究について色々質問しました。ウィークデーは全てが講義や教育の時間に費やされ、研究できるのは土・日だけ。しかも、国への研究費申請書を作成するのにかなりの労力を費やすとのこと。自分ももっと頑張らねば、と思いました。「イギリスの学生はよく勉強しますか？」との質問には、「1回目の試験ではほとんど合格しないので、2回目も試験を行います。それが悩みです。」と微妙な返事が…。同じ英語圏ですが、アメリカとイギリスでも学生気質が違うようです。

まだまだ話しはありますが、この期間は、教育・研究・国際性・人生についていろいろと考えさせられました。今後は在外研究によって得られた成果等を本校での教育・研究に活かしたいと考えています。末筆ですが、この在外研究を支えていただいた全ての方々へ心より感謝いたします。

2年間の人事交流を終えて



土木建築工学科 教授 橋本 堅一
(派遣先：呉工業高等専門学校、派遣期間：平成16年4月～平成18年3月)

人事交流が決まったのは、平成15年の12月です。高専の法人化の前ということになります。その年は徳山高専に赴任して、25年目の年に当たりました。その間、平成6年度に金沢大学の内地研究員で徳山高専を離れたことはありましたが、機会があれば外に出てみたいという気持ちは持ち続けていました。また土木建築工学科の18人の教職員のうち、11名は赴任時と変わらないメンバーでしたから、内部環境としても変化のない状況でした。そういう背景がありましたので私にとってはタイムリーな人事でした。今年度から高専間の人事交流が制度として始まりましたが、こういう制度は必要な制度であると個人的には考えています。

呉高専に2年間勤務したわけですが、当時、呉高専はJABEE受審を控えていましたので、それに協力するという大きな目的がありました。徳山高専ではJABEEの試行審査、本審査をすでに終えており、多少はそれに関わっていましたし、大学のJABEE審査にもオブザーバーとして審査団に加わったことがありますから、JABEE受審の要領は心得ていました。私の所属した環境都市工学科はトライアルというかたちで審査員資格者のアドバイスは得ていましたが、受審周知の時期であるとか学習保証時間等にあいまいな点が残っていました。機械工学科や建築学科はむしろ環境都市工学科よりプログラムの内容はよく整備されていましたが、受審周知の時期に自信がもてないということでその年は受審を見送ることにしました。環境都市工学科では周知の時期を詳しく調べた結果、その時期も問題なく、資料も残っていると判断して受審に踏み切ることにしました。

徳山高専は全学科が1プログラムで受審したため、自己点検書の作成に対しては、事務員の協力も得られ、一個人に負担がかかることはなかったように思います。しかし、呉高専では単独学科で

受審し、スタッフも徳山高専のように複合学科ではないため3分の2の11名と少なく、事務員の協力もなかったので苦勞しました。自己点検書は学科主任と二人で仕上げましたし、そのコピーも学生に手伝ってもらって何とか必要部数作成しました。受審前には評価資料を集めるのも大変な作業となりましたが、受審は比較的順調に終わることができたような気がします。これまでの経験が生かされたかたちとなりました。

2年目は、学科のスタッフが少ないこともあり、3年生の担任をやらせていただきました。これではびっくりしたのが担任の仕事の多さです。特に学生の出欠席を担任が管理するという制度には驚かされました。しかし、学生の日常の状況を把握できるので考え方によってはいい制度かもしれません。担任になってほとんど毎日、クラスルームに通って学生と話をしようと思いましたが、なかなか心を開いてくれないような気がしました。担任は久しぶりで、学生との年齢差を考えると仕方がないのかと考えました。そんな調子で1年間が過ぎてしまいましたが、なんと終業式の午後、クラス全員の45人が体育館に集まって送別会を開いてくれたのです。最後には寄せ書きとフラワーアレンジメントももらい、徳山高専に帰ってからがんばろうという気にさせてくれました。

今考えると短い2年間でしたが、多くの経験をさせていただき、楽しく過ごさせていただきました。最後にそういう場を提供していただいた多くの方々に感謝したいと思います。



「私の愛した徳山高専」

一般科目 助教授 加田 謙一郎
(鶴岡高専から徳山高専へ)

山形県にある鶴岡高専から、はるばる1200キロを自家用車で走破して、徳山高専へ着任してから、すでに9ヶ月が過ぎました。

徳山高専は、皆様ご承知の通り、全国の高専の中でも、大変に優れた、有名な高専です。1年間ではありますが、私は徳山高専の一員として過ごせたことを、大変な名誉と感じております。

徳山高専へ来て最初に感じたことは、学生の皆さんの基礎学力の高さです。皆さんの知的好奇心・理解力の高さは、徳山高専の最も大切な財産であると、私は信じております。シラバスにほぼ忠実に授業を進行できたことは、ひとえに皆さんの高度な学力と、力強い協力の賜物であったと痛切に感じます。「一を聞いて十を知る」と申しますが、徳山高専の学生は、まさにそのような優れた資質を持っていると思います。

また、学生の皆さんが、課外活動で見せつけてくれた底力にも、ひどく感心しました。授業で質量ともにハードな学習を要求されているにもかかわらず、運動部・文化部ともに極めて活動が盛んなことに、吃驚しました。私は、原田幸雄先生と桂哲男先生のお手伝いとして、卓球部の顧問を拝命しました。そして、インターハイの引率という、極めて輝かしい経験をさせていただきました。

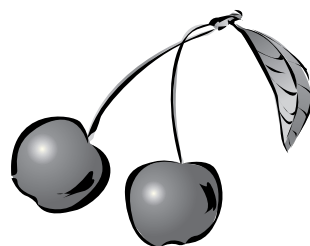
「高専でインターハイに出場することは、まず不可能である」と信じ込んでおりました。この経験は、若い人の可能性を既成概念で決めつけてはならないことを、改めて私に教えてくれました。

文化祭の運営を学生中心で行っている点にも、感心いたしました。鶴岡高専では、学生主事をはじめとする教職員が、声をからして指導しているのが現状です。徳山高専の学生の皆さんが、「やる時にはやる！」という、積極的な姿勢を持っていることに、大変羨ましい気持ちがいたしました。これは西日本の人に特有の気風・美徳なのではないか、とも考えました。鶴岡高専に戻った際、

是非ともこの気風・美徳について、大いに吹聴しなくてはという使命感に燃えております。

校務としては、「総合企画室」「テクノセンター」の仕事を体験させていただき、天野徹校長先生をはじめとする、徳山高専スタッフ皆様の、仕事に対するチャレンジ精神・開明的な考え方・真摯さにも、強く刺激を受けました。このスタッフのクオリティの高さも、徳山高専の大切な財産であると、私は考えます。

以上、〈私の愛した徳山高専〉について、舌足らずですが述べてきました。総じて、この人事交流期間中、学生の皆さんと徳山高専スタッフの皆様の〈大きな愛〉に包まれていたと、私は深く感謝しております。本当にありがとうございました。



「交流人事での体験について」



機械電気工学科 講師 森 徹
(和歌山高専から徳山高専へ)

今年度からはじまった高専間の交流人事により、4月に和歌山高専（以下、和高専）から赴任してきました。和高専では、まだe-learningなどの情報環境の整備が遅れており、この交流人事を利用して進んでいる徳山高専で勉強して来い、と送り出されました。

今回、交流人事での体験について執筆依頼がありましたので、機械電気工学科での授業、進路支援室での体験について述べます。

和高専では電気情報工学科に所属し、コンピュータ関連の授業を担当していたのですが、本校では機械電気工学科に配属ということで、決まった当初は不安に思いました。しかし、赴任前にこちらに来た際、学科主任から、プログラミング関係を教える先生が抜けたところだったのでプログラミング関連の授業を担当してほしいと依頼されて、それなら少しは役に立てるのではないかと安堵して赴任して来ました。実際に授業をしてみると、学生が静かで非常にまじめなのにはおどろきました。（和高専では、もっとガサガサとしています。）前期後半からは、授業にフリーのe-learningシステムを導入し、その上で授業資料の公開、課題の提示・提出・評価を行うようにしました。和高専の方からの要望もありましたが、私自身、それまでメールで課題を提出させていて、チェックや添削、後の整理に苦労していましたので利用しました。整理は楽になりましたし、学生にも評判は良かったように思います。後期には、伊藤先生も課題提出にこのシステムを利用しており、少しは学科の役に立てたと思っています。

支援室では、専攻科生および5年生の低学年に対する講演の主担当となり、講演学生との連絡、内容打ち合わせなどを行いました。また、12月からは「履歴書・エントリーシート（自己紹介書）作成講座」（主担当：一色先生）の手伝いもさせていただきました。（私自身もこのような講座は

初めてですので、手伝いというより勉強させてもらったというのが実情です。）支援室の活動については、和高専から中間報告（9月）に呼ばれた際、学生に非常に有益であり和高専でも実施すべき旨の報告をしています。後半は、現代GPでより忙しくなりましたが、いい勉強をさせてもらったと思っています。

和高専に戻ったら、この交流人事での経験を生かし、e-learningシステムの構築など情報教育環境の整備推進だけでなく、学生の就職支援などにも役立てるよう精進していきます。



「eラーニング—教育改善と自分の見直し」



情報電子工学科 助教授 松野 成悟
(宇部高専から徳山高専へ)

本年度一年間、高専間教員交流派遣者として受け入れていただき、ありがとうございました。私は経営学分野を専攻していることもあり、所属させていただいた情報電子工学科のお役に立てず申し訳なく思っています。また、交流の主たる目的であったeラーニング推進に関する研究プロジェクトに対しても具体的な貢献をすることができず、心苦しいかぎりです。

eラーニングを進めていくには、コンテンツの作成やLMSの運用など、教員の負担が増えるといった問題点も指摘されていますが、eラーニングへの取り組みによって、授業内容や授業設計、講義スタイルなどの改善にとどまらず、教員としての自分自身を見つめ直すよい機会になるのではないかと思います。

私を含め、大学や高専の教員の多くは、授業設計や教授方法などに関して、かなり私的で個別の経験しか持ち合わせておらず、それらの専門的なトレーニングを受けていないという事情があります。また、教育コンテンツのデジタル化やその無償公開・再利用が促進されることで、高等専門教育の現場においても、各々の学問分野における教育カリキュラムが世界的な規模で標準化され、個々の授業内容や教育コンテンツがモジュール単位でパッケージ化していくことが予想されるため、まさに、われわれ教員一人ひとりのレゾナントルが問われる時代が来ています。

ITをベースとするeラーニングには、これまでの一斉・対面授業を中心とした教育システムを代替する機能を持つ側面と、それを補完する役割を果たす側面とがあります。eラーニングを進めるには、その両面をうまく生かしながら、効果的な教育改善につなげていくことが必要であり、それは教員としての自分を見直すことにもつながると思います。そこでわれわれに求められるのは、何も奇をてらうような戦略ではなく、提供する教育

内容自体の差別化の追求と教育サービスの差別化の追求という、ごく常識的なテーマに取り組むことではないでしょうか。

前者は、世界的な規模で進行する授業内容や教育コンテンツの標準化に抗い、あくまでコンテンツ自体の独自性を追求することです。そのためには、地道な研究活動にもとづいて得られる最新の知見や成果を授業内容に反映させることによって、提供する授業にユニークな価値を不断に付加しつづけること、つまり研究にもとづく教育（research-based education）を貫くことが必要です。

後者は、標準化された既存の授業内容や教育コンテンツを活用することを前提として、その教授方法やプロセスなど教育サービスの面で差別化を追求することです。教授する科目の内容が標準化されるからといって、それを受講する学生の側の知識レベルや意欲、各種ニーズまでもが均質化されるわけではありません。むしろ、今日では受講者のバックグラウンドやニーズは多様化するばかりでしょう。したがって、きめの細かい学習者支援や学習進捗状況の管理、コミュニケーションの充実など、提供するサービス水準を向上させることが強みとなります。

われわれは、eラーニングを進めていく上で、この2つの取り組みをITと代替か補完かという視点から再検討しなければなりません。ITをベースとするeラーニングによって代替可能な部分については大胆な見直しが必要となります。逆に、補完的な関係にある部分は強化することによって、eラーニングと従来の教育システムとのあいだに新たな価値を相乗的に生み出す効果が期待できると思います。

eラーニングへの取り組みを契機として、とりとめもない雑感を述べてみました。派遣期間も残りわずかとなりましたが、宇部高専に帰任後、本校での経験を生かせるよう努力したいと思います。

「2年経ちました」



学生課 専門員 野頭 克己
((株) 西京銀行から徳山高専へ)

【寄付講座】赴任して数ヶ月たって、専攻科1年生の授業「経営管理」の依頼を西京銀行に持っていくことになった。16年度に本校が独立行政法人となり、そのお祝いとして開設された寄付講座であるとのことである。

【問題発生】銀行は営利企業であり、毎年述べ15名の行員が業務外の行為を行うにあたりそれなりのメリットを考えること。と言う命題を担当者が役員から与えられた。地域貢献事業であること、行員が既に出向して一部給与負担を学校側が行っていること、メディア発表できること、メイン口座として口座利用されていること等々の理由をあげたが、結局講師費用を支払うこと（寄附講座をやめる）とで決着した。

いざ講座が開始されると、受講生は本校4名、徳山大学生1名という結果となった。これではマスコミを呼んでも絵面が悪い。撮影当日だけ8人まで学生数を増やしてその場をしのいだ。

【平成18年度】時間が経つのははやいものだ。また、講座開設の交渉をするシーズンを迎えた。銀行の経営陣が交替し、様子を伺いに訪問。今度は昨年度の受講者数が少ないという指摘。今年も春先に希望調査をしたが同程度であるという返事をした。話がすすまない。出向者にやさしい銀行であるにつくづく感じ、怒りを抑えつつ学校に戻る。こうなったら意地でも受講生を増やすという気概発生。こんなことは事務方がやるのかどうかわからんが、やってやる。最初の授業が始まる直前に1年生全員が受講している「生命科学（必修）」の時間にお邪魔をしてみんなに頭をさげた。「お願いします。私のために受講して下さい。きっと良いことがあるはずです！」

【オリエンテーション】なんと12名の受講希望者が集まった！！見る顔、見る顔、天使に見えるではないか。これで（再び寄付講座にしてくれた）銀行との勝負は1勝1敗。

【毎週木曜日は授業の日】講座については過去2年の反省からカリキュラムを見直し、より体系的な内容、経営者となる素材を銀行サイドの目から解説、現場の人間の生の声を反映、することとした。そして講座にメリハリをつけるため、毎回 introduction として私が数分間おしゃべりすることとした。

【学生のためになる話、学生が寝ない話】最初の日はみんなにビートルズを聞かせた～TOEICがんばってね。次にワールドシリーズでの国家斉唱のビデオを見せた～歌詞をみてアメリカという国を考えよう。毎日新聞から気の利いたコラムを探してきた～SPI対策には新聞をみて語学能力を高めましょう。山本五十六の言葉紹介「やって見せて、言って聞かせて、やらせて見て、ほめてやらねば人は動かず」～あー何と教育というものは難しいものなのか。

機械電気工学科

就職・進学状況

自分の力活かせる職場選択を



5年担任 機械電気工学科
教授 門脇 重道

平成18年度の機械電気工学科の学生は総数40名で、就職希望者30名、進学希望者10名でした。そしてほぼ全員の進路が決まりました。機械電気工学科はこれまでも就職率（学生数に対する就職希望者の比率）が、他の学科や他高専と比べても、高い状況でしたが、平成18年度も同じ傾向となりました。

私は4年前に就職・進学を担当しましたが、そのときと比べて大きな変化が見られた点が何点かあります。1つは求人時期が繰り上がったことで、早い段階から来校される企業が極めて多く、私の手帳のスケジュール表は、2月頃から書き込みで埋まりました。結局500社以上の企業から求人をいただきました。このことと連動して就職試験の時期も繰り上がり、4月中に2/3程度が受験したと思います。また好況に伴う業務の拡大や団塊世代の定年への対応として、製造現場での採用を望む企業が増えたことも、私の4年前の経験と大きく異なる点でした。この3点目は機械電気工学科の特徴と思われる。

このような傾向を持つ企業の求人状況の中で、30名の学生諸君が就職活動に取り組んだわけですが、就職希望の学生諸君に話したことは、以下のような点です。一つ目は、就職希望先の決定時期が遅くなると、だんだんと不利になってくるということです。先に示したように、企業の求人時期や試験が早まっている中で、就職希望企業の決定が遅れるということは、受験の機会が失われていくということであり、さらに後ろになればなるほど、企業の求人枠は少なくなるということです。

二つ目は、自分の一生をも左右する企業の選択をするわけですから、早い段階から自分が将来どのような仕事をしたいかをよく考え、業種、職種、地域について、両親や先生方、先輩などの話をよく聞き、自分の考えを固めていく必要があるということです。私は高専生は極めて高い資質を有していて、同時に専門に関しても長い時間かけてじっくりと身につけていますし、これからの企業でも極めて重要な、アイデア開発力も創造教育の結果しっかり身に付いていますので、能力的に大学卒業生に決して負けないと考えています。そのような点から、自分の能力が十分に活かせる職種を選ぶようにすべきだと考えます。三つ目は、試験に対する準備として、SPIなどについての試験対策を行うと同時に、自分のアピールポイントの整理をしておくことが必要だということです。就職試験も競争ですから、他の人とは違う点を示せるほど優位であり、本学科の創造教育での成果などは是非活かせるようにしておくべきだと思います。

次に進学についてですが、進学希望者には次の点に留意するように話しています。それは進学するなら修士までは進むことです。大学への求人はそのほとんどが、修士を含む形で行われる関係で、まずは修士課程の修了者が優先的に企業選択を行うので、その残りに対して学士が希望することができる場合が多いということです。したがって、高専に求人が来ているが、大学では受験の機会も無いという現象が起りうるということを念頭において、進学をしないと、進学した結果、就職先の選択では不利になるということは十分起こりうるということを認識しておく必要があります。

進学についても、進学した後のことをよく考えて、自分が何を目指して勉学を続けるのかという点、過去の先輩たちの実績についての情報を参考にしながら、受験時期をよく勘案して、受験先大学を決定し、準備を進めていくことが求められます。進学については、大学の受け入れが極めて積極的ですから、勉強を続けようとする人には大変有利な状況です。

就職 ディーゼルユナイテッド、日本放送協会、東洋自動機、日本製鋼所、矢崎総業、協和発酵工業、ダイキン工業、日新システムズ、三菱重工業、トクヤマ、昭和電工、NOK、キャノン、リコー、ユーシン、日新製鋼、日立ハイテクノロジーズ、帝人、東陶機器、中国電力、大阪ガス、西日本旅客鉄道、KRYプロモーション、マツダE&T、安川電機、日本ゼオン、京セラコミュニケーションシステム、森精機製作所、HP I・ジャパン

進学 徳山高専専攻科（6名）、豊橋技術科学大学（2名）、九州工業大学、福井大学 順不同

情報電子工学科

就職・進学状況

終わってみれば、好景気



5年担任 情報電子工学科
助教授 奥本 幸

《平成18年度の進路状況は》

情報電子工学科43名(留学生2名)の進路状況を表1に示します。就職先を地域別でみると、5割が関東、3割が関西・中国地方、九州と地元がそれぞれ1割ずつです。

《いざ、就職活動へ》

今年の特徴は、二つあります。一つは情報戦です。自分の好きな会社にねらいを定めたら、リクナビやインターネットの掲示板、先輩などから徹底して情報を収集します。3月になると自腹で会社説明会にも参加し、企業の方から直接話を聞いていました。

もう一つは、徳山高専履歴書の活用です。履歴書とペアになっている自己紹介書は、志望動機や自己PRの項目がたくさんあり、書き上げるのに1週間以上かかります。その書き方が普通ではありませんでした。重要箇所の下線を引く、矢印を使う、果ては色ペンでアピールする学生まで現れました。4年生後期から始まる進路支援室のセミナーの成果です。自由応募の学生が3月に内々定を得ると、4月に6名、5月に11名と早い時期から内々定を手にすることができました。

今年就職活動が好調だった最大の理由は、好景気と、団塊の世代の大量退職です。図1に最近の求人数を示します。

《いざ、入学試験へ》

少子化を反映して、大学への編入や大学院への

表1:平成18年度進路状況

	就職	進学	合計
希望者数	29	14	43
内定者数	27	13	40

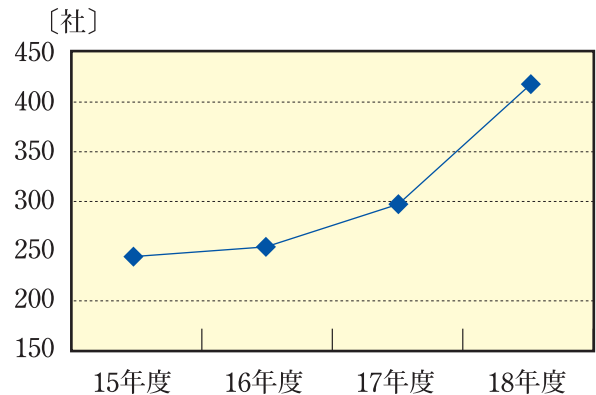


図1:情報電子工学科求人数

進学の間口が広がってきています。4年次の最終成績をみて、専攻科か他大学への編入か、さらに推薦試験か学力試験を受けるかを決めました。日程があれば、3つ、4つの国立大学の学力試験を受けることができます。今年は6月8日の広島大学を皮切りに、夏休み中の8月にも試験があり、最後11月15日までがんばりました。

面接では、入学後何をしたいか、卒業研究でどんなことをしているかが聞かれます。また、工学部はもちろん経済学部などでも英語の試験は必ず実施されます。

《これから進路を決める皆さんへ》

この好景気はあと2年くらいは続くと言われていいます。皆さんは、自分の好き・嫌いに基づいて、積極的快適さを求めようとする、能動的な行動ができる世代と言われていいます。あなたの好きなことは何ですか？英語ですか、物理、プログラミング、野球、テニス、ロボット、ボランティア・・・、何でもOKです。時間をかけ、創意工夫をしながら、とことん追求しましょう。そうすれば、楽しい進路選択が待っています。

就職 関西電力、ダイキン工業、安川情報システム、ヤフー、ソニーイーエムシーエス、セガトイズ、ジャパンシステム、日立ハイテクノロジー、東ソー、京セラコミュニケーションシステム、TDCソフトウェアエンジニアリング、国際ソフトウェア、富士通中国システムズ、富士通サポート&サービス、リンク情報システム、日立国際電気、富士通、ソニーセミコンダクタ九州、西京銀行、インフォコム西日本、NTTデータ、富士通九州システムエンジニアリング、西日本電信電話、サントリー、NHKアイテック、富士ソフトABC、NTT-MSC

進学 徳山高専専攻科(2名)、名古屋工業大学、広島大学、豊橋技術科学大学(3名)、山口大学工学部、大阪府立高専専攻科、岡山大学工学部、岡山大学環境理工学部、筑波大学(2) 順不同

土木建築工学科

就職・進学状況

出番が来た、君が主役だ



5年担任 土木建築工学科
教授 藤原 東雄

平成18年度土木建築工学科（以下CA）5年生は37名です。進学18名、民間就職17名、公務員2名と全員が決まっています。CAでは、学生は4年生から進学組、民間就職組、公務員組に分け指導を受けています。教員も同様に3組に分け指導しています。

公務員の試験は幅が広く、特に一般教養は英語から国語その他ほとんどの科目から出題されます。したがって、数ヶ月程度勉強しても実力がすぐ向上するとは限りません。できるだけ早くから過去問等を勉強する必要があります。両親や親戚の人が公務員は安定しているからなりなさいと言われてたくらいで公務員を目指すと成功しません。長時間かけて気長に勉強をする根気が必要です。最終結果が出るのも遅く、11月くらいです。失敗して会社を探すとすると、いい所は残っていません。絶対にどこかの公務員に合格すると言うくらいの根性と努力が必要です。学校の成績は関係ありませんから、やる気のある人は挑戦して下さい。

進学の選抜方法は大きく分けて、推薦方法と学力試験方法があります。推薦の場合は、大学により推薦基準が異なり、成績順で10%、20%以内が多く希望の大学の基準を自分で調べて下さい。基準内であれば口頭試問と面接があり合格率は非常に高くなります。

学力試験は大学により異なりますが、多くの大学は英語、数学と専門試験です。これらの科目を深く勉強する必要があります。幸いなことに、試験日が大学により異なりますので、うまくいけば4校くらい受験できます。今年も4校目に無事合格した学生がいます。

民間就職は、公共投資の減少から、土木系の求人は少なくなりましたが、それでもかなりの会社からの求人がありますので、心配はいりません。

一方景気回復のおかげで、建築関係の求人は多く来ています。民間就職で重要なことは、学校の成績、クラブ活動に積極的に参加することおよび人間性が求められます。挨拶もできない協調性のない人は会社の人事担当の役員はすぐに見分けます。面接をうまくやることも必要ですが、日頃から挨拶をしたり、積極的に教室の掃除をするくらいの気持ちを持ってほしいと思います。

本校には多勢の教職員が学生を支援しています。就職関係では、本校に来た求人票をPCに打ち込んでHPで全学生が見られるようにしている人、成績表、卒業見込み表、健康診断書等をすばやく作成してくれる人、エントリーシートや履歴書を丁寧に指導してくれる人、面接の練習をしてくれる人等がいます。人間は面白いもので、いろいろな人にお世話になっていても、合格すれば自分一人の力で合格したと思いがちです。目立たないけれど、陰で応援して下さいた人のことを忘れないようにしたいものです。4年生以下の皆さんは、たくさんの方が応援していることを忘れずに安心して受験しましょう。

最後にどうやって難関を突破していくかについては

1. 自分の進路に対する意識を高く持ち、目標を持って努力すること。
2. いろんなことにチャレンジする心を持つこと。
3. なぜその企業（大学）を選択したかをよく考えて入社（入学）してから、何をやりたいかを考えて目標を持って努力すること。

が必要と思います。

卒業式の際には、希望していた進路に決まって良かったですといえるようになって下さい。

就職 三菱化学エンジニアリング、西日本旅客鉄道、東ソー、大林組、ハッタ山口、サンテック、新井組、西松建設、東ソー物流、ダイキン、周南市役所、大鉄工業、国家三種、住友不動産、出光興産、宇部マテリアルズ、中電工、セトウチ、山崎建設

進学 徳山高専専攻科（8名）、広島大学（3名）、山口大学（2名）、豊橋技術科学大学、熊本大学、長岡技術科学大学、福井大学
順不同

機械制御工学専攻

就職・進学状況

専攻科で自分の可能性を広げよう!



機械制御工学専攻幹事
機械電気工学科
助手 逆瀬川 栄一

平成18年度機械制御工学専攻の2年生は10名で、就職が6名、進学が4名でした。

就職先としては、マツダ(学校推薦)、本田技研(自由応募)、とこれまでなかった自動車メーカへの就職が目立ちます。一方、進学先としては九州大、九工大、徳島大となっています。ここ5年の傾向では平成14年度～18年度の修了生38名のうち、進学が22名、就職が16名で、専攻科修了後さらに進学し大学院まで進む学生が多くなっています。

就職先を選んだ理由としては、専攻科の研究で得た知識を生かすため、インターンシップで良いと思ったためなどがあり専攻科での経験を就職にうまく結び付けている気がします。また、専攻科に進学するときから開発の仕事をするという目標を持ち、実際に希望の会社に就職した学生もいます。就職試験は1人2、3社受けており、自由応募で受ける学生が多くなっています。試験内容は、学力、面接が一般的ですが、その前に会社説明会、web試験がある場合や、グループディスカッションを行う会社もあるようです。

一方進学は、専攻科での特別研究をさらに続けるためという学生が多いです。試験は学校推薦の場合は面接が主です。面接では特別研究の内容についてパワーポイントで説明したり、専門に関する口頭試問を受けたりしています。進学先を決めるに当たっては、研究室を事前に訪問できる場合がありますので実際に足を運び、研究室ではどのような研究をするのかをよく確かめてから決めることが大切です。

大学院への進学率が上がっている現在、専攻科は大学院へ非常に有利です。会社で開発の仕事をした人、大学院で研究をしたい人はぜひ専攻科への進学を考えてみてください。

進学 九州大学大学院(2名)、九州工業大学大学院、徳島大学大学院

就職 マツダ、本田技研工業、大阪ガス、日立プラント、矢崎総業、三浦工業 順不同

情報電子工学専攻

就職・進学状況

キャリア活動へ向けて



情報電子工学専攻幹事
情報電子工学科
助教授 原田 徳彦

平成18年度の情報電子工学専攻の2年生は2名で、2人とも就職希望です。昨年は希望する会社の試験が自由応募のみである場合、複数の会社を受験していましたが、今年は2人とも推薦での採用試験に挑みました。進路支援室では、履歴書の書き方の指導や模擬面接を実施されていて、その指導の御陰で2人とも実力を十分に発揮でき、採用試験に見事合格しました。模擬面接では本番さながらのテンポの良い質問が浴びせられましたがどれも真剣にそして丁寧に受け答える姿が印象に残っています。昨年も書いたのですが、1年生の時に行われた長期インターンシップでは2人とも地元の企業にお世話になりました。そこで培った企業人としての責任感が結果に繋がったことに疑う余地は有りません。

また、本年度は大学院への進学希望者はいませんでした。1年生のインターンシップでは九州工業大学大学院と北陸先端科学技術大学院大学で指導を頂きました。アカデミックな大学院の空気を新鮮に感じながら、与えられた研究テーマに真剣に取り組んでいる様子をうかがうことができました。

最後に、皆さんはきっと自分にしか出来ないことが有るはず。自分の良さにはなかなか気づきにくいものですが、友達との交流のうちにそれを発見し、それを互いに認めながら大切に育てて下さい。

就職 NSソリューションズ、オリンパス 順不同

環境建設工学専攻

就職・進学状況

進路先は拡大方向!先を見据えて
力をつけることが大切



環境建設工学専攻幹事
土木建築工学科
教授 橋本 堅一

環境建設工学専攻の2年生は原級者2名を含む16名が在籍しています。そのうち5名が大学院進学を予定しています。内訳は豊橋技術科学大学2名、東京工業大学、九州大学、愛媛大学で、このうち九州大学大学院進学予定者は大学院大学総合理工学研究所に進む予定で、はじめてのケースとなります。愛媛大学も初めてのケースになると思います。就職では2名のもの佐賀県庁の上級職での就職が内定しており、専攻科から公務員の上級職で就職する例も初めてになると思います。また、大阪ガス、日新製鋼、レオパレスなども専攻科からの進路としては初めてのケースとなっています。これまでの実績のあるところでは前田道路に2名の就職予定があります。大学院進学では少子化の影響が、また就職では2007年問題、すなわち団塊の世代の大量退職の影響が顕著に現れているものと思います。このことは当然、進学しやすい状況、就職しやすい状況を助長するもので、就職も進学も拡大傾向にある結果となっています。大学院進学については、少子化はますます進むものとなるのでその傾向はますますいい方向に向くものと考えられますが、就職については一過性のところがあり、どの程度まで拡大するのか、またどの時期に悪くなるのかははっきりしていません。しかし、1、2年は大丈夫でしょう。ただし、就職では自由応募が拡大しておりますから、やってみたい仕事、行きたい会社があればチャレンジする姿勢が大事ではないかと思えます。大学院も同様で、難易度の高い大学院に勉強して挑戦する姿勢を強く求めたいと思います。

就職 日新製鋼、西松建設、若築建設、前田道路(2名)、日環特殊、佐賀県庁(2名)、大阪ガス、レオパレス

進学 豊橋技術科学大学大学院(2名)、愛媛大学大学院、九州大学大学院、東京工業大学大学院
順不同



就職・進学試験体験記



機械電気工学科5年
岩崎 大悟

就職を目指す後輩へ

私が受けた会社はNHKです。仕事の内容は番組を作ったり、あるいはできあがった番組を様々なところへ送出する技術系の仕事になります。しかし、こういった分野の仕事に必要なのはMEで学んだことよりもむしろIEで学ぶ専門知識の方です。現に1次試験の筆記試験では1つか2つか解けた問題はありませんでした。こんな知識のない私ですが、1次、2次、3次と試験をクリアし、倍率80倍の中、全国の高専でたった2人しか手にすることができなかった内定をいただくことができました。それは、面接で志望動機を答える時でも、履歴書にNHKでしてみたい仕事はどんなことなのかを書く時でも、どんな時でもその答えにオリジナリティーを持たせたからだと思います。参考書のようなきれいな回答も悪くはありません。でも、そのようなきれいな回答よりも、他の人がもってない自分らしさ、あるいは他の学校にはない徳山高専らしいところをアピールした「ちょっと目立つ回答」の方が試験官の印象は良いと思います。現に私も3回の面接全てで高専ならではの創造製作のことについて詳しく聞かれました。就職試験は勉強がどれだけできるだけではなく、人間性ややる気、あるいは与えられたことをただこなすだけではなく、自分で考え行動するよう力があるかなどを見られるのです。

とにかく、就職試験に挑むにあたって最初にするはその会社を知ることです。どのような理念を持った会社だとか、どのような取り組みをしているのかをしっかりと理解するのです。そうでなければきちんとした志望動機やその会社についての意見が言えるわけありません。

そして会社のことを理解し、自分なりの言葉で履歴書が書けたら、次は先生を使うことです。履歴書の添削や面接の練習は先生の力なくしてはできません。そして良い履歴書を書くにも面接になれるにも、たくさん書き直して、たくさん練習をすることです。ですから、そのためにも先生を思いっきり使いましょう！！！！

そうして試験までに十分準備をして自分らしさをしっかりと持っている答えを見つけたら、もう何の心配もいらないと思います。あとは学生生活の中で一つでいいから自慢できることをして下さい。部活でも勉強でも、学校の外でもどんなことでもいいです。それがきっと就職の時には強い味方になるとと思います。それでは頑張ってください。
NHK(日本放送協会)



機械電気工学科5年
木本 誠二

自分のやりたいこと

私が、徳山高専に入学したのは、ものづくりがしたかったのと就職率の良さがありました。景気があまりよくない時だったので、卒業後のことを考えると進学よりも就職の方に頭が働いていました。

実際に高専での授業でもものづくりをしたり、部活動でロボコンに参加するなどしているうちに、それらのことにとっても興味を持ち、「まだ続けていたい」という気持ちがふくらんでいました。そして、就職か進学かを決める時に、「もっとものづくりをしたい」と感じ就職か進学かでとても悩みました。最後は、自分のやりたいことを優先して、大学への進学を決めました。

進学先は高専の人が多く集まり、ものづくりが学べてロボコンにも出場している豊橋技科大に決定しました。大学でもロボコンに出場するなどして、自分の技術を高めていきたいと考えています。しかし、推薦がもらえたからといって合格したとは限りません。2の手3の手を考えて、どこに行くかをいろいろな資料を比べながら探しましたが、自分の行きたい大学をたくさんある中から探すのは大変でした。実際に過去問などをやり試験に備えたりしました。

豊橋技科大への進学試験は推薦で書類選考だったので、進学したい動機や現在関心をもっていること、将来に対する抱負などを慎重に考えて書きました。ただ、資格の欄を書く際に自分が何の資格を持っているのかを探すのに苦労しました。気づくと取ることができるのに取っていない資格もたくさんあり悔しい気持ちです。なので、まだ取っていないで取るチャンスのある資格は早めに取っておくことをお勧めします。

私は自分のやりたいことを続けたいと思って進学を決めました。なので、進学・就職で悩んでいるのであれば、先生や親・友達に相談することも大切ですが、今自分がやりたいことは何なのかを考えるのが一番の解決策だと思います。

豊橋技術科学大学

就職・進学試験体験記



情報電子工学科5年
森本 晃

就職活動を振り返って

私が受けた会社はNTT西日本です。試験の内容は毎年一次試験がSPIと面接、二次試験が面接と聞いていたのですが私はSPI対策で本を買ってそれをやりました。しかし私は面接対策に当初なにをすればいいかわかっていませんでした。とりあえず私がしたことは、先輩に話を聞き、インターネットなどでいろいろ情報を調べ、あとはメモ帳に考えを簡単に書くことをしました。しかし、模擬面接の日、結果は惨敗でした。その後もう一度別の先生に模擬面接をしてもらいましたが私は同じことを言われました。「考えが全然固まっていない」と。そうして私が教えてもらったのは去年の面接の質問の答えを書いて一字一句覚えるという方法です。覚えるという方法は駄目だという話はよく聞きますが私はそのようなことは決してないと思いました。最も大切なところを一字一句間違えずにはっきりと頭の中に残っているからこそどんな質問もすらすら答えることができるのではないのでしょうか。そうして結局私は模擬面接を5回やりました。そして一次試験の日、会場は広島でSPIは多少本より難しかったけどパターンは同じなのですらすら解きました。面接はかなり緊張したけどいいことは言えたと思います。大阪本社であった二次試験の最終面接も雰囲気がとても怖かったけど、しっかりと自分の意思を伝えました。仮内定通知をもらったときは思わずガッツポーズをするくらい嬉しかったです。こうして就職活動を終えて今思うことは誰かにアドバイスをもらうことはとても大事だということ。先輩、先生、企業の方、アドバイスをもらうことは非常に役に立ちます。絶対に聞いておきましょう。正直な話私はもしこれをしてもらってなかったら絶対に受かってはなかったでしょう。今はいろいろアドバイスをくれた方に頭が上がらない状態です。就職試験は何かと大変ですが頑張れば必ずその苦労は報われます。頑張ってください。

西日本電信電話(株)



情報電子工学科5年
中光 顕子

大学編入の厳しさ

皆さんは大学編入についてどのように考えているのでしょうか。私は初めのうちは編入試験をそれほど難しいものとは思っていませんでした。「高校生の大学受験の方が大変だろう、それに比べれば編入試験なんて…」などと考えていました。ですが、編入試験は想像以上に難しいものでした。

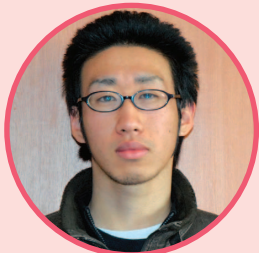
私が編入しようと決めたのは4年生の秋頃でした。他の人に比べてスタートが遅かったので、人の倍以上勉強しなければなりません。また、受験する大学を選ぶのにも時間がかかってしまい、結局志望大学を決めたのが5年生の春頃になってしまいました。これによって、試験科目の把握が遅れてしまい、さらに勉強する期間が短くなってしまいました。ですが、私の受験した大学の試験科目が数学と英語の2科目だけだったので、何とか受験日まで勉強することができました。数学は日ごろから一生懸命勉強していたので、あまりやりこまなくてもすみました。しかし、英語は高専の勉強だけでは足りなかったため、勉強するのが大変でした。結局、私の編入試験は満足できるものではありませんでした。

もし、大学編入をしたいと思うなら、早めに志望大学を決めて試験科目を把握してから勉強することが大切です。そして余裕を持って勉強をすることをお勧めします。また、面接試験の対応などをしておくことも大切です。

皆さんが私の文章を読んで、少しでも参考にしていただければ嬉しいです。編入試験は険しい道ですが、思い残すことのないよう、一生懸命頑張ってください。

山口大学

就職・進学試験体験記



土木建築工学科5年
山縣 敬済

就職活動を終えて

高専入学当初、私には夢や目標などまったくありませんでした。ただ、大学を受験するつもりはなかったので、どこでもいいから就職できればいいやくらいの気持ちで学校生活を送っていました。

そんな私が、まともに自分の将来の事を考え始めたのは、4年生の終わり、学年全体が就職や進学に向けて慌しくなってきた頃でした。いままで、何も考えずにダラダラと生活していた私には当然やりたい仕事もなく、特に希望する就職先もありませんでした。しかし、自分の目標に向かって努力している友人達を見ていると、自分だけ取り残された気分になり、さすがに焦った私はそれ以来、自らの意思で就職情報をチェックしたり、

様々な会社のホームページにアクセスしてみたり、就職活動に真剣に取り組むようになりました。

そうしていく中で、次第にあれをやりたい、これをやりたいという感情が芽生え始め、最終的に地元に残りたいという気持ちと、高専で学んできた土木の知識を様々な分野で活用していきたいという想いから、出光興産への受験を決意しました。成績はあまりよくなかったのですが、幸い試験は面接のみで、これといった能力もなく自分をどうアピールしてよいのか不安はありましたが、持ち前の明るさと、「自分らしさ」をしっかりと表現することで、なんとか乗り切れました。

もしも、私と同じように自分の道が見つからず悩んでいる人があれば、少しずつでも良いので、いろんなことに興味を持ち、自ら前に進む努力をしてほしいと思います。そして「自分らしさ」をしっかりと表現できる人になって下さい。そうすればきっと、明るい未来が見えてくるはずですよ。

出光興産(株)



土木建築工学科5年
富永 大

大学受験をして

私が大学受験を確実に考えだしたのは、4年生のときのインターンシップに行った時です。それまでは、働くということに対して怖いという恐怖から逃れるために進学を考えていました。しかし、インターンシップの時に私は何もできなく、とても悔しい思いをしました。また企業の方に、進路のことについて聞かれた時、進学を考えていると言うと向上心があって良いと褒められ、大学への進学を強く勧められたので現在の力に満足するのではなく、さらに自分自身を磨こうと決め、大学への進学を考え始めました。

しかし、大学への進学を決めてもどの大学を受験するかがなかなか決まりませんでした。どの分野について学びたいという具体的な理由がなかったからです。まず、建築系の学科のある大学を全て調べました。また、インターネットを通じて各学校の授業内容・評価・就職先など詳しく調べ、興味のある学校を選びました。私は設計をしたいと思い高専へ入学したので、初志貫徹と言うことでデザインをより勉強できる学校に絞りました。受験する大学さえ決まれば、後は勉強のみです。試験の出題傾向も調べていたので、試験も私の予想していた感じの問題が出題されました。面接でも答えられないと諦めるのではなく、相手に伝えたいという姿勢を必死にアピールしました。結果は1勝1敗でしたが、どちらも私がとても行きたかった大学なのでとても嬉しかったです。

最後に、大学への編入を考えている皆さんへアドバイスするならば、大学の偏差値などとらわれず、きちんと自分の目標に合う学校を選ぶことが重要です。もし、まだ目標が見つからない人は少しでも多くの大学を調べて、その中から自分の興味のあることに挑戦すればいいのです。地道な努力こそ、成功への鍵となるのです。

私の体験談が少しでも多くの人の役に立てられたら幸いです。

山口大学

就職・進学試験体験記



機械制御工学専攻2年
藤井 健

就職活動を行って

就職活動を経験し、私が感じたことをお伝えします。また、これから就職活動を行うという人にちょっとしたアドバイスができたと思います。

2007年新卒採用の内定を獲得するために、専攻科1年の11月から就職活動を開始しました。就職エントリーを行ったのは、自動車メーカーであるホンダ、スズキ、マツダ、富士重工、自動車関連会社であるショーワ、ホビー関係の田宮模型です（全て自由応募）。主にレース活動を行っている会社を選択し、最終的には第一志望であるホンダの内定をいただきました。就職活動では、F1マシンを見ることができたり、自動車の技術的な意見交換ができたりと、とても楽しかったという印象です。

そこで、活動を通してのアドバイスは、

- ① 気になる企業は早めにチェック
- ② 面接は質問の受け答えではなく、会話をとということです。

まず①についてですが、企業によってはセミナーに参加しなければ就職エントリーを受付けないということがあります。上記の企業の中にも11月頃からセミナーが開始され、セミナー不参加者はエントリーできないというところもありました。少しでも気になる企業があれば、早めに採用情報をインターネット等で確認しておいた方が賢明です。

続いて②についてですが、面接は丁寧に会話するような態度が好まれるように感じました。さらに、その会話の中で面接官（企業側）に質問してみたり、あえて製品等の批評をすると、「おっ？」と興味を持ってもらえます。ただし、問題点と、自分ならこういった解決策をとるといった、具体的な内容をもって説得できるようになっておきましょう。そうして面白い提案ができれば会話が弾み、熱意も伝わると思います。

2点ほど就職活動で気づいたことを挙げてみましたが、就職活動に一番大切なものは、やはり「この会社で何かをしたい」という気持ちだと思います。これから就職活動を行う皆さん、悔いの残らないようしっかりと考え、がんばってみてください。

本田技研工業(株)



情報電子工学専攻2年
中村 俊

私の就職活動

私の就職活動は、専攻科1年の1月頃から本格的に始動しました。まず『自分がやりたいこととは何か』を考えました。私は画像処理という分野に興味を持っていて、就職してからもこの分野に携わっていければいいと考えていました。そこで、この分野に絞って企業を検索しました。検索方法として、Yahooリクナビに登録しました。ここではたくさんの企業が登録していて、この中から自分の条件（業種や勤務地など）にあった企業を検索できたり、会社説明会の連絡があったり、エントリーシートもここから書くことができます。また、高専にも就職関係の資料がたくさんあったので、それも見ました。3月頃に高専にあった資料の中でオリンパス株式会社の資料を見つけました。その資料の採用予定数に『専攻科生5名程度』と書かれていました。昨年度までは高専枠というのはあったみたいですが、専攻科枠というのは無かったみたいです。しかし今年度から専攻科枠を新たに設けたということで、これを利用するしかないと思い応募しました。試験は筆記（SPI試験）と面接でした。面接では私が画像処理に興味を持っていて、卒業研究でもその分野に関して行っていることをアピールしました。その結果受かることができました。

私が就職活動を行ってきて、大事だと思うことは次の2点です。

- ①自分がやりたいこととは何かを明確にする
- ② 有利になる点（私の場合、専攻科枠や卒業研究のテーマ等）を利用する

興味のない分野の企業に就職しても、絶対続かないと思います。どんなことでもいいので、自分のやりたいことを一つでも見つけることが、就職活動の第一歩であり、これからの就職活動もしやすくなると思います。また、世の中には就職活動をしている人たちがたくさんいます。その人たちと差をつけるためには、自分の有利になる点を探し、それを利用したり、アピールしたりすることが重要だと思います。これから就職活動をする学生のみなさん頑張ってください！

オリンパス(株)

就職・進学試験体験記

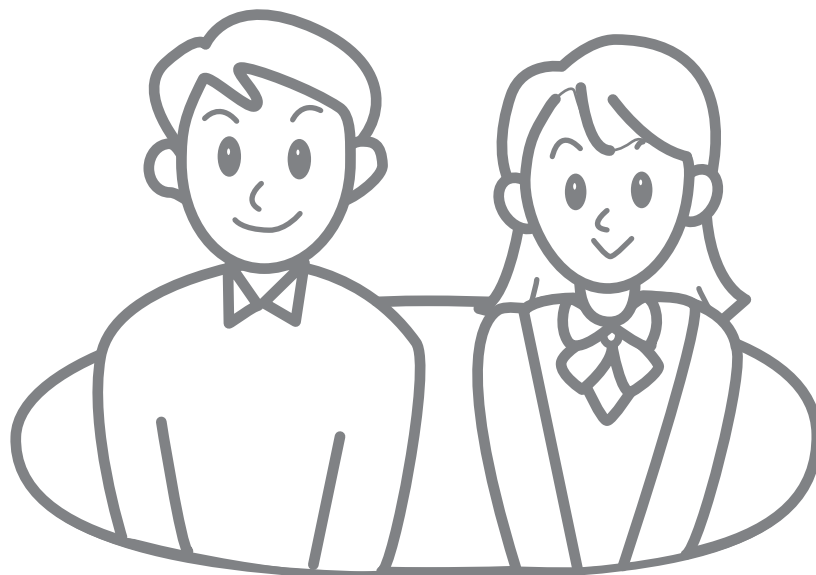


環境建設工学2年
中村 淳一

大学院受験体験記

今回、大学院の進学体験記を書いてくれと先生から頼まれてまず思い浮かんだ言葉は、「早めに手を打て」です。この一言に尽きると私は昨年大学院の試験を受けて痛感しました。大学院となるとやはり専門的な授業がほとんどを占め、自分の専攻に関する研究や実験が多くなると思います。したがって、まず自分がどのような事に興味があり、どの大学院を受験するかを早めに決定することが大事となります。できれば専攻科1年内にはっきりと決定するべきだと思います。そして必ずその大学の研究室を訪問して、思いを伝えることが大切です。また、推薦を受けるのか学力試験を受けるのか、そこではっきりと答えを出しておくべきだと思います。私の場合、学力試験を受けることになり、愛媛大学の研究室訪問を行ったのは5月の連休明けでした。この時期に研究室訪問を行った私が、専攻科2年生の中では一番遅かったようです。他に進学した友人は春休みの内に研究室訪問を済ませていました。私の場合、愛媛大学の感想しか述べられませんが、友人との話も含めて言うと、他大学からの受け入れを積極的に行っている大学院も多いようです。したがって早期に研究室訪問をし、熱意を伝えてください。学力試験で入学を希望する場合は試験で点数を取ることが絶対条件ですが、私の場合大学側からいただいた過去問は3年分でした。数学と英語に加え専門5教科と、大学院試験の中では教科数が多いほうだったと思います。しかも、専門教科の内2教科は高専生活で習ったことのない教科でした。勉強開始直後は、教科の多さと習ったことのない科目の勉強方法で、何回も嫌気が指しました。しかし、運がよかったといいますか徳山高専には愛媛大学出身の先生が2人おられたので、その先生に頼んで過去問10年分と学生のノートを半ば無理矢理借りてきてもらいました。それからは、もうとにかくやるしかないの、寝る間も惜しんで勉強しました。その甲斐あって無事合格できたわけですが、これから大学院の進学を考えているみなさんへ私から助言するとすれば、「できるだけ早く、また打てる手は全て打て」です。頑張ってください！

愛媛大学大学院理工学研究科 生産環境工学専攻





やりたいことをヤル！

機械電気工学科 第27期卒
片山 孟
takeaway911@yahoo.co.jp

このページを開いてくれたあなた！ いやあ～、やっちゃいましたねえ。私の文章を読んでもうなんて、なんて不運なお方。飽きたら最後まで読まなくてもいいですよ。でも、最後まで読んでくれた方には、僅かでもプラスになればと。

私は今、日本の文化・経済・行政の中心都市で生活している。何もかもが中心。仕事も勉学も遊びも。私がこの街で得たものを伝えたい。

「人生は、やりたいことをやったモン勝ち。一度しかない人生なのだから。」

私は、徳山高専から新卒で入った会社を、入社後僅か半年で辞めてしまった。理由は「やりたくなくなった」から。細かな理由は色々あったけれど、もっと楽しそうなことに挑戦することにした。退職から今までにやったことは、株式投資（トレード）・ITコンサルティング・ITソリューションの営業・技術職の人材紹介など。「やりたいこと」とは「ラクなこと」ではない。上場企業の役員への営業やプレゼンテーション前は、夜も眠れないほど緊張したし、結果が出なかったり損失が出てしまったときなどは、髪の毛が大量に抜け落ちてしまうほど苦労したりもした。

それでも、自分がそのとき一番やりたいことをやっているから、悪いストレスではない。何からでも必ず得るものがあるし、やり甲斐を感じることができる。自分が、自分の「起業」という目標に日々一歩でも近づいていることが実感できているからだ。

ここで、私は問いたい。あなたは、やりたいことをやっているだろうか？ 人生にやり甲斐を感じているだろうか？ 感動したりビリビリするような興奮を味わったりしているだろうか？

仕事柄、色々な大人たちを見ているが、今この国には人生を楽しんでいない人が多すぎると思う。本当に自分のやりたいことが見つけられず、ただ惰性で毎日を生きている大人が。こういう大人たちを見て若い人たちはどう思うだろうか？

みなさんに、学校では次の力（ちから）を身に付けて欲しいし、そういう教育をしてもらいたい。

- 自分の夢・希望・目標を持つ力
- それらを実現させる為の力
- 物事の真実を自分で探求し見極める力
- 相手の本質を見抜く力
- 友人と協力して目標を達成させる力
- 周りを巻き込んで感動させる力
- 他人との比較ではない絶対的な力

よく聞く話に「学校でやりたいことを見つければいいよ」というのががあるが、私はこれには真っ向から反対する。はっきり言って学校では何も見つからない。今の日本の教育は（マクロに見て）そういう教育をしていないから。やりたいことは自分で探し求めるもので、どこかに転がっているものではないのだ。こうやって、やりたいことを先延ばしにしている人は、大学に入っても、都会に出ても、外国に行っても何も見つからない。

私自身、在学中は積極的に勉学以外の活動に参加した。高専祭では、メイン製作を担当し、図書館棟の吹き抜けにあるモニュメントの作成に携わった。実際、社会に出てみて一番役に立ったのは、勉学よりもこういった活動で培った力だった。（熱意のある先生方のご指導・講義が有益であり、教養として必要なのは言うまでもない）

最後になるが、みなさんには是非「やりたいこと」をやってもらいたい。日本を代表する企業をはじめ多くのフィールドは、徳山高専から輩出される志の高い人材を、これからも必要としている。



「電気通信大学に編入して」

情報電子工学科 第26期卒
電気通信大学 電気通信学研究科
情報工学専攻 菅原 典子

私は、徳山高専情報電子工学科を卒業し、電気通信大学電気通信学部情報工学科に編入しました。現在は、同大学電気通信学研究科情報工学専攻に進み、ヒューマンインタフェースの研究をしています。本稿では、高専時代のことや大学生活のことについて少し述べたいと思います。

高専ではコンピュータのハードウェア及びソフトウェアや、電気・電子・通信技術に関する様々な分野について学びましたが、私は特に、ソフトウェアの分野について興味をもちました。ソフトウェア実験や卒業研究に力を入れて取り組んでいたという思い出があります。進路決定の際には、自分の興味のある分野についてもっと多くのことを学びたいという思いから、電気通信大学に編入することにしました。大学に編入して感じたことは、高専時代にしっかり授業に取り組んでいて良かったなということです。高専の授業はカリキュラムがしっかり組まれており、1年生の頃から時間をかけて基礎からじっくり学ぶことができました。高専時代に身につけた知識や論理的な考え方が今のベースになっているように思います。

電気通信大学は東京都の調布駅のすぐ側にあります。編入してからまず、単位認定の作業をしました。高専で取得した単位を、授業内容が近い大学の講義の単位として認定してもらいます。できるだけ多くの単位を認定してもらえるように走り回ったのを覚えています。学部3年生の時には、多くの講義を受講し、できるだけ卒業に必要な単

位数を取得するように努力しました。4年生になると研究室に配属され、研究室に通う毎日になりました。私の研究室は、ヒューマンインタフェースをテーマに研究している研究室で、約20人のメンバーがいます。毎月お誕生日会を開いたり、春・秋には合宿したりとイベントも多くあり、楽しい研究室です。研究室では、論文ゼミ、javaゼミ、プログラミングゼミなど様々なゼミがあり、こういったゼミを通して力をつけていきます。メンバーと議論するのも大切なことです。高専と同じように卒業研究もあります。私は、集合教育に用いる講義支援システムを開発しました。javaを用いたWebアプリケーションとして実装しました。このシステムは実際に、プログラミングの講義で使用されています。この成果を学外の研究会にも報告しています。修士1年生となった今も、同じ研究室で研究を進めています。一日中研究室で作業している日が多く、高専の時と比べてコンピュータに向かっている時間が圧倒的に長くなりました。夜遅くまで研究室には多くのメンバーが残っています。

研究以外では、インターンシップやサークル活動に力をいれてきました。インターンシップは、学部3年生の時と修士1年生の時に参加しました。実際に企業で働き、貴重な体験をすることができました。2つの企業でそれぞれ違った面を見ることができました。高専でもインターンシップの機会は用意されていたので、活用しておけば良かったなと思っています。サークルは、ユネスコ研究会に入って、調布市にある少年団の子ども達と月1回のペースで行事を行っています。指導員という立場で子ども達を支えていく中で、自分も成長することができました。また、このサークルで新しい仲間と出会い、この活動が楽しみの一つになっています。

今は就職活動中で、企業説明会などにも参加し、多忙な毎日を送っています。

高専時代や大学でのいろいろな出会いや経験、そして自分が好きなことを勉強する中で、私自身成長することができたと思います。皆さんもそれぞれの進路や将来のことを考えながら、充実した日々を過ごしてください。



土木建築工学科 第28期卒
九州工業大学工学部 建設社会工学科
大下 沙織

高専を卒業し、九州工業大学に編入して早くも1年が経とうとしています。大学という高専とは違う世界で、私は今までに体験できなかったすばらしい時間を過ごしました。

大学で私は徹底的に友達づくりに努めました。普通、編入生はクラスの人とあまりなじみません。私たちの知らない空白の2年間に彼らにはあるからです。たとえ編入して歓迎されても話が合わなくて最初は苦しいと思います。また、編入したての頃は、授業や単位の仕組みや学校の教室の位置、教科書の購入方法、先生方の名前や担当科目などの基本的なことはもちろん、初めての一人暮らしでやっていけるのか、何もかもわからないという不安でいっぱいです。しかし、私は一緒に入学した編入生や1年生、同じクラスになった3年生、サークルの仲間たち、編入された先輩方、他大学の学生、色々なイベントで知り合った方など、たくさんの人たちに積極的に話しかけることで、数え切れないほどたくさんの友達を作ることが出来ました。今では編入生をはじめとし、近くに住んでいる友達と毎日助け合って生活しています。

大学では高専のように皆が同じ教室で同じ授業を受けるわけではありません。自分で自分の受けたい授業を選んで単位を取っていきます。また、大学の授業は高専の先生方がされる授業のように丁寧ではありません。しかし、大学では高専で勉強してきたこと以上のことを勉強することはほとんどありません。こんなことを書いてもいいのか

分かりませんが、編入して勉強面で新たに得たものはあまりありません。他の大学がどうなのかは分かりませんが少なくとも九工大のカリキュラムはそうでした。だから私は好きな科目をたくさん取って他のクラスメートより比較的楽に単位を取ることが出来ました。

編入だと大学生活というのは本当に短いです。まだ1年経たない大学3年の終わりからもう就職活動や卒研が始まります。高専で進学を決めて安心して大学に編入したのに、あっという間に次の進路を決めなくてはならない、という感じです。だから私は大学に編入される人がいたら、自分のやりたいことは何か真剣に考えておいて欲しいと思います。

この1年間、私は学生生活を楽しみました。こんなに毎日のように遊んだり、無茶したりして、何をしに大学に来たのかと言われてそうですが、高専時代、こういう時間が持てなかった私には必要な経験だったと思います。社会に出てしまえばなかなかこういった時間は取れません。だからといって、勉強をすることは忘れてはいけません。将来何をすればいいのか、何がしたいのか迷いがある人は一度大学という新しい世界でいろいろなことを経験するのもいいのではないかと思います。高専は5年という長い期間、環境の変化がありません。そのため自然と考えや視野が狭くなってしまふと思います。大学でいろいろな人に出会い、いろいろな考えを見て、広い視野で世界を見てみたら、もしかしたら今は思いもよらないような自分に本当に合った夢に出会えるかもしれないと思います。私は大学に編入して本当に良かったと思っています。

退職者あいさつ 長い間ありがとうございました

『のどかな学園の思い出』

一般科目 教授
吉田 輝



春に迎える定年を前にして、着任した往時の事をよく思い出す。最初に心に浮かぶのは、決まって、山の斜面を削ってできた敷地に、幾つかの施設があるばかりの風景である。

私が初めて徳山高専を訪れたのは、昭和50年7月のよく晴れた日であった。就職のための面接があった日である。学校は明るい土色の敷地の上に、管理棟とその隣の電算機室、専門棟、第一体育館、学寮等が建てられていた。図書館の建物と水泳プールの周辺にはまだ土が盛られたままだになっていた。陸上競技場や野球場の整地はとても十分とはいえなかった。学校の周囲やグラウンドの境界となる柵や生け垣は皆無であり、実に空漠とした光景である。しかし、広々とした黄色い大地にはずっしりとした存在感があった。

その時期からちょうど2年後の本校を描いた絵画が、管理棟2階の会議室の壁に掛かっている。それは管理棟のかなり高い位置から南側を描いたものだが、画面のほとんど半分は本校の敷地である。画面にはサインの上側に、「1977 7」と記されている。陸上競技場は整備されているが、私が最初に目にしたときに抱いた印象とあまり変わらない。

さて、本校の図書館が創設されたのは開校3年目で、私が着任したのと同じ51年4月であった。図書館にはひととき感慨深い思い出がある。私がこの半生で一度しか目にしたことのない家族的な、のどかな光景がそこで展開されたからである。

図書館が創設されたのは4月であるが、書物の搬入などの作業のため、待望の閲覧室が開架されたのは、約2ヶ月遅れて、梅雨時であった。新しい図書館は、学生諸君の好評を博した。それは書物に親しむことができるという理由だけではなく、この年の蔵書はまだ6千冊を超える程度で

あり、このわずかな書物以外には何もなかった（新聞さえ当時は談話室に置かれていた）のである。そしてこの閲覧室を利用する学生も4年生、5年生はいない時期である。それだけにあり余る空間だけがあった。

微かに黒味を帯びた、遮光ガラスの窓に囲まれた閲覧室には、落ち着いた雰囲気があった。広い床には、彩度をおさえた色調の分厚いカーペットが敷き詰められ、どっしりと重い机や椅子がならべられた。冷暖房も完備していた。

さて、豪華なこの閲覧室の利用の仕方であるが、当時は机について読書をしている学生よりも、上履きを脱いで（当時は土足厳禁だった）、カーペットの上に思い思いの恰好で寝転がって本を読んでいる者の方が多かったのである。とにかく学生数は少なく、それに応じて教職員も少なかったので、寝転んで読書をしていても誰の迷惑にもならなかったのである。初代の校長も寝転がっている学生の間を歩いて、自分の読みたい本を探しておられたものである。

しかしこのような光景は、完成年度には既になくなっていった。

長い間ありがとうございました

大きい夢を

土木建築工学科 教授
木村 武馬



本校創立2年目の昭和50年に、この高城の丘にやってきました。実は最初の訪問は、その前年の仮校舎(旧富岡小学校)でした。この事情を知る人も、ほんの一握りになりました。以来、瞬く間に30年余が経ちました。終始この学校に誇りと自信をもって、楽しく過ごすことができましたのも、ひとえに皆さまのお陰と、深く感謝いたします。退任のご挨拶にあたり、大急ぎで振り返ってみます。校務としては、途切れず担任をしました。赴任の初年度に1期生を、そして最後の今年度には31期生を。学生や保護者との触れ合いが、懐かしい思い出として残っています。

初期の10年は、全てを手探りで作る、文字通りの草創期。大変ですが、それなりに創造的な面白い時期でした。保護者(当時は父兄と呼んでいました)が、人生の先輩(年上)でした。次が完成期。施設やスタッフもこの時期には、整備充実されました。保護者とは、同世代の親しみが持てる間柄になりました。年賀状のやり取りが続いているのは、多くこの時期の保護者(なぜか、卒業生とも)です。留学生とも茶道、会食、スキー、山登りなど楽しく遊んだものです。上の写真は平成10年1月的々庵での初釜、アハメド君とのツーショットです。そして、最近の変革期。制度、組織、運営が大きく変わり、今も変わりつつあります。保護者会は、専ら年下相手になりました。それぞれの時期で、それぞれの楽しさがありました。

学生側から見た、こちらの印象は違うかも知れませんが、若い世代との付き合いも、楽しいものです。若くなければもてない発想には、いつも触発され、勉強する毎日でした。近年、「創造演習」や「土木の日コンテスト」また「ひと輝きプロジェクト」で、手仕事(工作)が取り入れられて来ています。これらも、楽しく頼もしい限りです。来年はいよいよ「デザコン」です。夢が膨らみます。終りに私ごとですが「竹とんぼ」では、陰に陽にご助力いただき、またご迷惑をかけました。とくに、平成15年元旦の「巨大竹とんぼ」フライト成功は忘れられません。下の写真がその時のものです。十数人の在校生や卒業生、また保護者や地域の方々の姿があります。楽しくも、ありがたい思い出です。

好きな歌に河島英五の「野風増」があります。この言葉(ノフウゾ)は、山口弁です。高校時代の同級生Mさんの想いを、ご夫君が作詞した“山口”の歌なのです。「息子よ、ハタチになったら、一緒に飲みながら人生を語ろう」という内容です。歌詞の「男は…」を、「若者」に替えて諸君に送ります。

若者は「生意気ぐらいが丁度いい」…若者よ「大きい夢をもて」

若者は「生意気ぐらいが丁度いい」…若者よ「大きい夢をもて」



長い間ありがとうございました

裏山の四季

学生課 技術専門員
村上 洋士



本稿の執筆を依頼された瞬間、急に寂しさがこみ上げてきた。初めて徳山高専を訪れたのは、奉職前年の昭和50年8月、専門棟や実習棟にはコンパネが張られたなか、竣工したばかりの管理棟に案内された。面接を済ませて数人の教職員の方々にもお目にかかったが、20才代前後の方が多く、これから発展して行くであろう徳山高専を象徴していた。

さて、私は毎朝、裏山の景色を眺めて職場の事務室に入ることになっている。毎年、裸木からの瑞々しい木々の芽吹き、万緑、紅葉、時に雪景色と日々変化する美しい四季を見るのが楽しみだ。特に晩秋から年末にかけての櫨はぜの紅葉は見事。また、季節の鳥も多く飛来する。12月中旬を過ぎると、小鳥の鳴き声が裏山全体にけたたましく響き渡り、1月、2月の寒い時期になるとボイラー棟の煙突の先に鷹が留まることがある。この発見は、上野五郎先生（平成2年退官）から雪のある日、鷹が飛んできたことを告げられ機械電気工学科の3階から双眼鏡を覗いたのがはじまりである。春には時鳥、耳を澄ませば筒鳥の鳴き声も聴きとることができる。昨年しんねんの11月はじめから12月中旬にかけて、私の黒い車のバックミラーに冬を告げる尉じょう

びたき
鵓びたきが飛んできて白い糞を垂らして飛び去った。憤慨したが、尉じょう鵓びたきのすることだからいいか。

これまで、機械電気工学科の工作実習と創造製作、そして研究支援が主であったが、今では高専ロボコンの製作支援、地域貢献として「夢広場」における製作教室も開催しており職務は多岐にわたる。また、毎年11月に開催される高専ロボコンにおいては、競技内容が年々難しくなっているが、学生の発想はすばらしく、マシンは着実に進化し競技に対応できるロボットが毎年できあがっている。しばらく国技館から遠のいていたが、平成18年度は久々の出場を勝ち取り、しかも技術賞と特別賞の二つを受賞して明るいニュースを持ち帰ってくれた。

はじめての工作実習で、最も気を遣ったのが「安全」である。特に機械操作においては「絶対に怪我をさせてはならない」という緊張感から、精神的にも体力的にも疲れ果ててしまった。1～2年も経てば慣れるであろうと安易に考えていたが、30年経過した今でも依然として気の抜けない日々である。開校以来、今日まで無災害を維持できたのは、校長をはじめ関係教職員の方々のご尽力と、「安全規則」を守ってくれた学生に感謝し、今後も無災害が続くことを切に願っている。





新任者紹介

よろしくお願ひします



機械電氣工学科 助手
すずき あつゆき
鈴木 厚行

◆ご出身はどちらですか？

神奈川県横須賀市です。黒船が来港し、ペリーが上陸した町で育ちました。

◆本校にこられる前はどちらに？

埼玉県川越市にあるメーカーに勤務していました。

◆徳山高専の印象は？

洗いたてのタオルのような、さっぱりとした雰囲気を感じます。グラウンドの白っぽい印象などからも、晴れた日の空にマッチする学校だと思います。

◆ご家族は？

(気ままな) 一人生活です。かつては9人家族でした。

◆ご趣味はなんですか？

知らない街を歩くこと。写真を撮ること。考え事をする事。

◆今後の抱負をお聞かせください。

「よく考え 心ゆたかに たくましく」
日々成長したいと思います。



情報電子工学科 助手
やなぎさわ ひであき
柳澤 秀明

◆ご出身はどちらですか？

埼玉県本庄市で育ちました。大学も埼玉県内にあり、自宅から通っていました。山口に来て、はじめての一人暮らしをしています。

◆本校にこられる前はどちらに？

埼玉県にある東洋大学川越キャンパス (工学部) で非常勤講師をしていました。

◆徳山高専の印象は？

緑に囲まれたすばらしい環境。帰りながら見る夜景がきれい (悪く言うと、山の中・・・坂キツ過ぎです)。
とても自由な環境。

◆ご家族は？

現在は、一人暮らしですが、埼玉に妻と娘が1人います。

◆ご趣味はなんですか？

趣味と言えるものはありませんが、テニスを始めたいと、思い始めて早2年・・・ (ルールわかりませんが^^;)。

◆今後の抱負をお聞かせください。

早く仕事に慣れ、学生と一緒に楽しみながら研究をして行きたいと思っています。



よろしくお願ひします



土木建築工学科 助手
おおた あきこ
太田 明子

◆ご出身はどちらですか？

熊本県熊本市です。結婚して親元を離れるまで、二十?年間熊本で過ごしました。熊本のことなら何でも（私の分かる範囲内で、ですが。）お答えしますので、お気軽にご相談下さい。

◆本校にこられる前はどちらに？

日本学術振興会の特別研究員として、母校、熊本大学工学部環境システム工学科に所属していました。

◆徳山高専の印象は？

非常にアットホームな雰囲気だと思います。と同時に、色々なことに取り組む姿勢は、学生、教員、事務スタッフを問わず旺盛に思われ、「小粒ながらもびりりと辛い」という印象です。

◆ご家族は？

夫と子供二人の4人家族です。祖母、義祖父母が健在で、帰省すると大家族の雰囲気が味わえます。子供達が曾孫の務めを果たす姿は微笑ましくて大好きです。

◆ご趣味はなんですか？

子供の頃はお菓子を良く作っていました。今も、お菓子を焼きたいという思いはあるのですが、中々チャンスがありません。

◆今後の抱負をお聞かせください。

次第に環境にも慣れてきましたので、今後は自分なりに新しいことに挑戦していきたいと思っています。



事務部長
もりした かつひこ
森下 克彦

◆ご出身はどちらですか？

鳥取県西部の伯耆（ほうぎ）町。国立公園大山の麓で、日本海までも車で20分の、山・海が近い自然に恵まれた地です。

◆本校にこられる前はどちらに？

財務省の地方機関である中国財務局で主に国有財産の管理と処分の仕事をしていました。

14回の転勤で中国5県の地（広島市・呉市・倉敷市・岡山市・鳥取市・松江市・下関市）を転居し、15回目の転勤で本校にお世話になることになりました。

◆徳山高専の印象は？

高台にあり、事務室からの景色が素晴らしいと思います。

見る事、聞く事、初めての事がほとんどで、毎日貴重な経験をさせていただいています。

◆ご家族は？

子供は3人（1女2男）ですが、いずれも東京に在住、Uターンを願っているところです。

単身赴任の時もありましたが、平成15年の転勤から再び妻と共に転居しています。

◆ご趣味はなんですか？

読書（主に時代小説、推理小説）ですが、購入することなく本校図書館と市立図書館にお世話になって借用しています。

◆今後の抱負をお聞かせください。

学生諸君の学校生活を少しでも支援できるよう心掛けていきたいと思っています。



よろしくお願ひします



庶務課庶務係
ふくしま けいこ
福島 恵子

◆ご出身はどちらですか？

山口市です。

◆本校にこられる前はどちらに？

広島大学医学部で庶務系と医療事務系の仕事をしていました。特に病院では患者さんと接したり貴重な経験をさせていただいたと思います。

◆徳山高専の印象は？

緑に囲まれて敷地も広く、グラウンド、野球場、テニスコートなどの施設が充実していると思いました。

◆ご家族は？

ひとり暮らしをしています。

◆ご趣味はなんですか？

映画鑑賞です。ちなみに昨年のベスト3は以下のとおり。

1. 時をかける少女
2. ハリー・ポッターと炎のゴブレット
3. 007 カジノ・ロワイヤル

◆今後の抱負をお聞かせください。

現在、正面玄関横の受付に席がありますので、内部のみならず外部の方にも適切かつ迅速な対応を心がけていきたいと思っています。

不慣れなことばかりでご迷惑をおかけしておりますが、精一杯頑張りますのでよろしくお願ひします。



庶務課庶務係
かわかみ よしひろ
河上 喜弘

◆ご出身はどちらですか？

山口県光市です。高校まで光市で生活しました。光市が大好きなので、またいつかは、光市民に戻りたいと思っています。

◆本校にこられる前はどちらに？

山口大学人事課で、主に職員の採用を担当していました。

大学・高専職員に興味のある方は、どんどん職員採用試験を受験してみてください。

◆徳山高専の印象は？

自分の卒業した高校と比べると自由な雰囲気を感じますし、大学に比べると、程よく管理されているように思えます。私みたいに楽な方に流されがちなタイプの人間にとっても、勉強や研究をするには素晴らしい環境だと思います。また、私自身は就職活動で苦い経験がありますので、就職率の高さも素晴らしいものだと思います。

◆ご家族は？

妻と娘の三人家族です。

◆ご趣味はなんですか？

野球と娘。

野球はするのも観戦するのも大好きです。約20年野球してます。

いつもどこでも「男の子」に間違われる娘は見ているだけで癒されます。

◆今後の抱負をお聞かせください。

少しでも徳山高専の力となれるよう、まずは、徳山高専と仕事に慣れることです。

弱輩者ですが、よろしくお願ひします。



よろしくお願ひします



庶務課人事係主任
くすき よしろう
楠 芳郎

◆ご出身はどちらですか？

鹿児島県は枕崎市出身です。大学進学のため山口県に渡ってから、もう16年になります。

◆本校にこられる前はどちらに？

平成7年に採用されて以来、ずっと山口大学です。徳山高専に来る直前は、総務課情報企画係（現：情報推進課情報推進係）に所属し、物品請求（Web発注）システムと財務会計システムの導入・管理に携わっていました。

◆徳山高専の印象は？

何分、大学勤務が長かったので、当初は規模の小ささ（失礼！）と学生の若さ（+礼儀正しさ）が一番強烈でした。今はさすがに慣れましたが…

また、これまで働いてきた中で、本校と地域（特に周南市）との強力な結びつきが構築されていることを実感しています。

◆ご家族は？

世帯主としては未だ独り者です…

◆ご趣味はなんですか？

- ①パソコン（でもこれが仕事になってしまうと結構きつい）
- ②サッカーTV観戦（日本・欧州・南米なんでも）
- ③サッカー現地観戦（以前は遠出もしてましたが今は近場で何かあると足を運ぶぐらい。それでも生で観るのは面白いです）

◆今後の抱負をお聞かせください。

「庶務」という分野自体、初めて担当しますので現在も学ぶことばかりの毎日ですが、本校にお世話になる間は少しでもお役に立てるよう努力し、自身も成長していきたいと思ひます。



会計課出納係
たけやす つとむ
竹安 勉

◆ご出身はどちらですか？

光市です。高校を卒業して長崎へ移り、光市に戻り、現在は山口市に住んでいます。徳山高専までは車で約1時間かけて通勤しています。

◆本校にこられる前はどちらに？

平成15年10月に山口大学に採用され、総務課広報・調査係で働いていました。仕事は主に広報関係（広報誌作成等）と指定統計調査の仕事をしていました。

◆徳山高専の印象は？

初めて徳山高専を訪れた時は、緑に囲まれ景色も抜群だと思ひました。それまでは映画の題材にもなった『ロボコン』のイメージが強かったです。（映画を見た当時は、周南市や光市の見覚えのある風景が流れたので懐かしかったです。）

◆ご家族は？

妻（H17.5入籍）と長男（H18.4出生）です。家の中がだんだん賑やかになってきました。

◆ご趣味はなんですか？

バレーボールと料理です。バレーボールは9人制やソフトバレーをして地域交流をして、料理は休日にいろいろな料理、新しい味に挑戦しています。（冷蔵庫の余り物しか使わないのでたいした料理では・・・）

◆今後の抱負をお聞かせください。

会計関係の仕事は初めてなので、少しでも早くいろいろな会計の知識を身につけられるように日々努力して、みなさまのお役に立てるようがんばっていきたく思ひます。



よろしくお願ひします



学生課教務係主任

はまい とみよし

濱井 富吉

◆ご出身はどちらですか？

山口県下関市出身です。

下関は、明治維新に所縁の神社、建物等いろいろあります。

巖流島（舟島）、市町村合併により角島大橋で有名な豊北町角島も下関市です。県内で、唯一、車に下関ナンバーがつけました。

◆本校にこられる前はどちらに？

山口大学にいました。宇部地区に7年、残りは山口地区勤務でした。

◆徳山高専の印象は？

景色の良いところだと思いました。山が近いので、花粉症の時期は、多少気になります・・・。

高専坂は、2回ほど歩きましたが、運動不足がたたり結構きついです。

山口市小郡町からだ、車通勤でないと無理だな・・・と思いました。

◆ご家族は？

下関市を含めると計5人です。

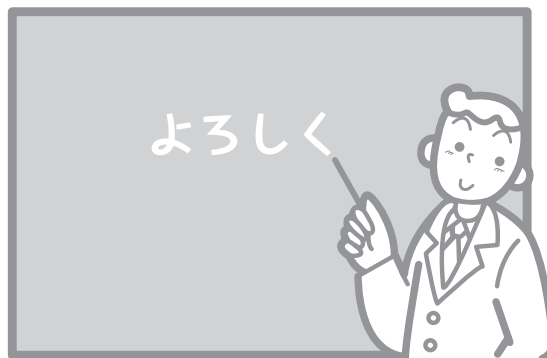
◆ご趣味はなんですか？

映画鑑賞、音楽鑑賞、読書、日帰り小旅行、ビリヤード、カラオケ、ごくたまに実家に帰ったときのみ、魚釣りです。

◆今後の抱負をお聞かせください。

高専の情報は、非喫煙者の方には申し訳ないですが、喫煙ルームでいろんな先輩、先生方の話を聞かせていただいて、大変勉強になっています。

出来れば、健康を考慮すると禁煙といきたいところですが、節煙が精一杯というところです・・・。



編集後記

2006年の世相を表す「今年の漢字」に「命」が選ばれました。これは、新しく生まれた命への喜びもありますが、奪われた命、絶たれた命、そして、命への不安が増していることから選ばれたと思います。私も「命の大切さ」を感じた年でした。

一方で、いろいろな方々との交流を通して、人との「出会いの大切さ」を感じた年でもありました。そこで、本号では「ちらばる あつまる」を主題として特集を組みました。2006年度から国立高等専門学校機構により、高専間教員交流制度が実施されています。現在、徳山高専へ3名の先生方が、徳山高専から1名の先生が配置換えとなり活躍されています。その他、数名の先生方が、国内外の大学に勉強に行かれています。各先生方が書かれた体験記では、徳山高専の中からでは見えなかった面に気づかされます。ご一読頂ければ幸いです。

「徳山高専だより」も年度により発行回数は異なりますが、この度60号をむかえることとなりました。60年を区切に、再び生まれた年の干支に還るという還暦という言葉があります。第1号、第2号の編集後記に書かれていますが、「徳山高専だより」の主旨は、学校の考え方や現況を保護者や関係の方々知って頂くことです。今後も、初心を忘れることなく、年度の記録的な役割を持たせながら、学生・保護者や地域の方々との橋渡しができる広報誌になるよう努めます。

最後に、年末年始のお忙しい中、本号に執筆いただいた方々、執筆依頼から校正まで協力いただいた方々に、改めてお礼を申し上げます。(M.M)

徳山工業高等専門学校 Tokuyama College of Technology

徳山高専だより No.60

発行 総合企画室

所在地 〒745-8585 山口県周南市学園台

TEL (0834)-29-6200(代表)

FAX (0834)-28-7605(代表)

印刷 三共印刷

発行日 2007年(平成19年)3月8日

URL <http://www.tokuyama.ac.jp/>

Tokuyama College of Technology
